家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第五十六巻　第六号

奈良女子大学・附属図書館
昭32.5.2

6

日本幼稚園協会

トッパンの童謡絵本

みなさまに長いあいだ、かわいがっていただいた、トッパンの童謡絵本が内容造本とも一新されて、より親しみやすい美しい決定版となって発売されました。以前にもまして、かわいがって下さるようお願いいたします。

全6集
各集7曲収録・楽譜付・合紙堅牢製本・
1・2・3・4集発売中
各70円

東京日本橋茅場町 トッパン

一回わずか三〇円で、こんなに幼児の生活を楽しくするものが、他にあるでしょうか？　しかも、一生何をするにも大切な、リズム感をよくするのに、なくてはならないものです。だから、どこの幼稚園にも、保育園にもあるのですが、ぜひ一人に一個を持たせましょう。

いろいろな類似品がありますが　やっぱりこれが一番工合がよいと言われています　どこの楽器店にも（アメリカでも）必ずあります
替紐もあります

1個30円

株式会社 白櫻社

幼児の教育　目次

――第五十六巻　六月号――

表紙……武井武雄

新しい幼稚園の教師……及川ふみ…(2)

〝幼児教育の危機〟に対する反省……秋山ちえ子…(4)

施設と子ども（桜花幼稚園）……林　叡子…(8)

教育計画とその実践……大阪市立常盤幼稚園　広岡キミエ…(13)
名古屋私立青葉幼稚園　山口たつ…(20)

・西桜幼稚園研究集会……樋口澄雄…(24)

・放送教育……小山田幾子…(27)

・自然の環境設定……上野初枝…(30)

・東京の幼稚園展……友松あきみち…(35)

幼稚園の自然観察環境について①……松村義敏…(38)

幼児のボール遊びに関する研究⑥……岡本卓夫…(42)

保育者の心理（六）
理想の保育者の資質について④……西本脩…(48)

（ヨーロッパの旅）
緑の六月……平井信義…(52)

幼児の知能の研究（13）
知能値の誤差と信頼度（下）……村山貞雄…(55)

（3月号）保育雑誌より……(60)

編集主幹　及川ふみ　編集主任　津守　真
協力委員　牛島義友　斉藤文雄　多田鉄雄　波多野完治　山下俊郎　（五十音順）

新しい幼稚園の教師

及川ふみ

この春、学窓を巣立って、幼稚園の教師として、新しく就職された数おおくの仲間をむかえたことは、わたくしたち幼稚園の世界に、新しいいぶきが感じられて、まことによろこばしいことである。また、力強さが感じられてたのもしくもある。

＊

どこの幼稚園にも、一人や二人の新しい教師が赴任されたことであろう。そして新しく入園した幼児や、その保護者の方を相手に、これらの新しい教師というかたは、どんな様子であろうか、どことなく落ちつかないふんいきのうちに、四月、五月とすぎ去ったことであろう、と考えられる。

幼稚園の教員養成機関も、全国的にその数は、次第に多くなってきており、また、その教育の内容においても、次第に充実されつつある今日、そこを卒業した学生たちは、一応児童心理学や、教育学その他の諸教科の学習に、また音楽、保健、図画工作などの専門教科などの知識技能についての修得、それに加えて、教育技術の面も、現場での教育の実習で、よく学ばれたことであろう。

＊

しかしながら、これらの人びとの育成せられた学園と、現在就職された幼稚園の現場との間には、必ずしも一致するところばかりではないのではなかろうか。おそらく、いろいろの点でへだたりのあるということは、いなめないことである。

まず多くの学園と、幼稚園の現場とでは、土地柄の点において異なっていることはいうまでもない。学園の所在地が大都会地であって、就職先の幼稚園が小都市であることなどは普通のことであろうし、また、同一の都市の内でも、一方は住宅地環境であり、他方は商店街であるとか、工場地帯であ

るとか、などで教育実習上においての経験がそのままに、卒業後の現場の幼稚園に通用することは、少ないようである。このようなことが、常に大きな障りとなって、新しく赴任した教師がとまどうことが多いようである。また、教育実習の場は多くの場合、常にかこわれたといおうか、教育しやすい特殊の環境において、なされるのである。たとえば、実習の対象幼児の数の点においても、一組四〇人の最大の線でする機会は少なく、多くの場合は比較的少人数を対象とすること。あるいはそこに集まる幼児の質、家庭およびその他の生活環境、あるいは幼稚園内における環境の整備について、比較的に十分な準備のある教育実習。あるいは実習についての時間にも、回数的にも充分にその機会を重ねることの困難な点など、いろいろの弱点をもっていることもいなめないことである。

これらの教育実習についての不充分さは、現場におられる先輩諸姉の寛容なる受け入れ体勢に期待をもって、その軌道にのせてもらいたいと切望するものである。

＊

また、新しく幼稚園の教師となった多くの人びとは、純真なまなざしで、幼児たちを率直に観察して、教育指導の理念にもえている。そこでその観察の事実をありのまま、習得した知識と単純に結びつけて、保護者にこれを伝えてその指導の協力に供えんとする場合がある。こんな場合にそれがスムースに保護者の協力となって順調な指導へのきっかけとなる場合も多いのであるが、ときにはこれを伝えるための表現の言葉のつかい方に不備なところがあったり、あるいはその態度について、心よしと受け入れなかったりして、その指導の面において協力されないばかりか、かえって保護者への心象を阻害したりすることなどもある。これらいろいろの点について、日々の教育の面においても、保護者に対しての態度についても、先輩の指導と援助を受けることが多いのである。

＊

新しい教師について、とどかないと思われるいろいろな場を考えてみたのではあるが、このはじめにも述べたように、とにかく新しい教師は、若さの力強さ、精力がみちみちていること。なさんとする意欲も旺盛であること。また学窓において習得した新しい知識をもっている。それに加えて、幼児に対して指導せんとする純真無垢な強い愛情ももっている。これらの長所を大きくとりあげて、とにかく新しい、若さのいぶきを幼稚園に注がせてみたい。新しく教師を迎えられた幼稚園の先輩の諸姉は、これらのういういしい人びとの上に温かい手をさしのべられる、よき指導者であられることを期待してやまない。

（筆者はお茶の水女子大学付属幼稚園長）

〝幼児教育の危機〟に対する反省

秋山ちえ子

〝幼児教育の危機〟が「幼児の教育」のような専門誌にとりあげられているが、本当に〝幼児教育〟は世間から忘れられているだろうか。

私はそうは思わない。

〝幼児教育の危機〟という言葉は〝幼稚園教育の危機〟とおきかえられるほうが適切ではないかとさえ思う。ここ十年間に、作業教育とか情操教育とかいろいろいわれた。それぞれの教育の主要性はあらゆる機会に説かれたが、どうも直接その渉にあたる人だけが踊っているといった感じである。ところが、幼児教育は、P・T・Aや社会教育などで、みっちりと勉強させられた母親の一人ひとりが、幼児期の教育がいかに大切かを知り、真剣にこの問題にとっくみはじめている。

やさしくかかれた〝幼児の心理〟や〝幼児のしつけの本は、出版すれば、はずれることがないという定評や、最近、地域によっては、P・T・A連合会などで〝就学前の子ども〟の教育活動がされていることなど、幼児教育の重要性が行動にあらわれたものとみてさしつかえないと思う。

もっとも、一か月に一度ぐらい小学校に幼児を集めて、学校生活にしたしませるといったことをしているP・T・A連合会の幼児教育は、ともすると〝さあ、静かにしておねえさんやおにいさんのし

ていることをみるんですよ〟といった式のものになりがちで、自発性を全くおさえられた幼児が気の毒になることもあるが――。

一時、われもわれもと幼稚園に子どもを入園させ〝幼稚園ブーム〟といった現象をつくりあげたのも、母親の、社会の、幼児教育に対する自覚がさせたことである。

それが、二―三年のうちに幼稚園の入園希望者が減少して、幼稚園教育の危機などと叫ばれるようになったのは、一体どうしたことなのだろう。

ここらでしっかりと幼稚園教育の根本から考えて、しっかりした態度をもってかからないと、それこそたいへんなことになりそうである。

× × ×

まず第一にあげられるのは、為政者の官僚主義。

地方財政再建に関する法律を適用されることになった市町村が、最初に手をつけたのは、市町村費による教員給の削減であった。

役所で働く人にとって何よりも大切なのは、帳面ズラの美しさである。このテイサイを整えるとき、いつも犠牲になるのは、一ばん弱いところで暴力も振えず、弁説もサワヤカでない幼児を対照とする教育など恰好なエジキである。

予算がへれば、幼稚園教諭の数もへり、設備なども理想のものからはなれる一方である。環境の整備されていないところで、りっぱな教育ができないことは誰でも知っている。予算をけずった役人でもよく知っているはずである。

それを、あえて、見て見ないふりをしてすませてしまう官僚根性に対しては、世論の力で何とか反省を求めることが必要である。

× × ×

幼稚園教育の危機は、このような外的条件も大きくものをいうが、それより前に反省されなければならないことは、内的条件、つまり、幼稚園教諭に対する信頼の問題があると思う。

もっと端的にいえば、幼稚園入園者がへっているのは、幼稚園教諭に対する母親の不信のあらわれである。

完全な教育は、まずりっぱな教育者がなければならない。幼児教育の重要性が認められているにもかかわらず幼稚園教育の危機に対して役所の予算をかえるほどの世論がないというのはどういうことを意味しているのだろう。

もしも、幼稚園に入園させて教育するのが幼児にとって最上の道であるときまっていれば教育熱心な母親たちは、こんなに黙っているはずがない。幼児教育は、小学校教育に比べて、字を読み書きしたり、数をかぞえたりといった技術的な面より、精神の発達にそった指導の面が多い。

これを思うと、たえず勉強や研究がされていなければならないは

ずなのに、小学校に比べて、結果がすぐはっきりとあらわれてこないものなので、研究や勉強が忘れられがちである。しかも、幼稚園教諭の九十九・八パーセントまでが謙虚でツツマしやかな女性であることが、それに拍車をかけていることも否めない。

遊びの中に、教育の目的がいつもやんわりと考えられていなければならないはずなのに、はなはだしいところでは、幼稚園の生活のすべてが遊びそのもので、教諭は女中的存在である。母親とは、自分の子どもにしか目がいかないもので、ヨクバリである。あれこれと、非教育的な要求をしているのをみかける。

ところが、それに対して、教育者の立場から、理路整然と、しかも感じよく、母親を納得させられる人が何人あるだろう。

こんな状態では、心ある母親だったら、いくらピアノがあっても、遊び道具が豊富でも、不安で幼稚園にはいかせたくないと思うのは当然のことだろう。

親が教師に対して抱く不信の一つの原因として、親からの物質的援助をうけることに馴れ過ぎていることもある。

これは、小、中学校でも同じである。終戦直後の物資不足の時代の〝助けあい精神〟からならいざ知らず、もうその時期は過ぎているはずである。

人間は何といっても弱いもので物質的援助をうけることによって生ずる心の負い目は、ときには、教育本来の目的からはなれたことに対しても、目をつむってしまうような場合も起こしてしまう。

待遇が悪いのなら、堂々と経営者と話しあうべきで、組合などそのためにあるのだ。どうしてもなくてならない先生方だったら、国民は待遇の改善にも協力を惜しまないと思う。よく〝もう少し月給がほしいと思うけれどそんなことをしたらツブれてしまう〟という声もきくが、そうかといって、教育者としての誇りまで捨てるようなことをして、何でりっぱな教育ができようか。

たいへん意地の悪いいい方をしたが、何はともあれ、幼稚園の教諭の質の向上は、危機にあたって一ばん考えられていいことだと思う。

× × ×

つぎに、幼稚園教育の危機は、セクショナリズムに問題がある。

同じ日本の幼児なのに、何と千差万別の城を築いていることだろう。

幼稚園、保育所、簡易保育所、その上、公立、私立など、それぞれが、自分の立場を守ることだけに大声をあげている。

幼稚園では、きれいにアイロンのかかったエプロンをかけ、バス

ケットをさげてくるのが幼児であり、保育所では、親は生活のために働き、一日放り出されているのが幼児であるといった具合に、幼児の本質的なものまでちがって考えられているように思えることもある。

公立は公立、私立は私立で集まってはいるが、日本の幼児を対照にして問題別に研究会を持つことなどあるだろうか。

また、幼稚園、保育所の人たちが同じ幼児教育をする人として、待遇のことなど真剣にとりあげて話しあったことなどあるだろうか。

女性が多いということで大ぶ損をしているのに加えて、この、まとまりの悪さでは、幼稚園教諭の地位の向上などいつまでたっても夢物語である。

また、このことは、幼稚園教育の危機を招く一因をなしているし、危機をのり越えるのにたいへんな障害にもなる。

× × ×

最後にもう一つ。いま、日本に私立幼稚園の数が多過ぎること。幼児教育は、家庭が主体になって地域社会の人びとによってされるのが理想で、教育に理解を持った母親がいて、近所に遊び仲間がいれば、ここで十分に目的は達せられるはずである。

幼稚園にいく子は、一人っ子で幼児の社会生活が十分にできないとか、環境が悪い子などが主になるのが理想ではなかろうか。

そして、大切な幼児教育は、多少とも利益を目的とした経営者にまかせられるべきでなく、国の費用を持って、幼児教育の場が整備されるのが当然と思う。

幼稚園令が小学校と関連を持ってつくられているのに、幼稚園に通う幼児が日本中で二—三割ということも、おかしなことである。幼稚園が義務制になるのがわれわれの最終の目的である。

その世論をつくるためにも現在幼稚園教育にたずさわっている人のフンキを祈りたい。

（筆者は評論家）

書　評

幼稚園における指導の実際 ①

——健康を主とした一日の指導——

▲文部省編

印刷も、りっぱで、内容も豊富で、とても読みやすい上に、本書には、類書にないような特長があるように思う。サブタイトルに「健康を主とした一日の指導」とあるが、当然なこととして、園の目標の全領域にわたる一日の指導の計画と実例がのっている。端的にいえば例の六領域にわけた精密な（？）叙述がないところに、この書の第一の長所があると思う。健康とか、社会生活の指導というものは常に全面的総合的に行われるものであることを、よく物語っていると思う。それゆえに、その記述が非常に現実的実際的になっている。（坂元彦太郎）

〈フレーベル館発行　A5判 340頁 112円〉

施設と子ども

〈静　岡　市〉

――桜花幼稚園――

林　　叉　子

◎施設という環境に幼児はどのような影響をうけるだろうか

幼児は非常に感受性が強く刺激を受けやすい。何となれば、幼児は被暗示性、被影響性に富んでいるから環境に引かれていくが、これは幼児の動作、遊戯に大いに関係する。

一例をあげるならば、園舎のつくり方、保育室のいろいろの物の配置など、幼児をとりまく周囲の様子が、学校向きであるか、幼稚園向きであるかによって、幼児が住みよいか住みにくいかということになろう。保育室は幼児の部屋である。住みよい部屋でありたいと思う。壁の色ももちろん大切であるけれども、保育室のすべての配置も、幼児を中心として考えてすることが望ましい。保育室の空気が乾燥しているような、また何となく温かみの少ない感じがするようでは、幼児は動きたくても、動かれなくなる。静かにしたくても、静かになれないから、さわぐようになる。幼児は人形ではない。心もからだもいきいきと動いているので、保育室の環境のよしあしによって、直接間接に周囲よりの影響関係における生活反応関係が及ぼされてくる。要するに周囲の配慮が必要であるということになる。

ものいわぬ声なき環境に、知らず知らずの間に引きつけられ、楽しくもなれば、いやにもなる。環境とはその中に生活するものに、あるはからいをするものであるから、保育室という環境が幼児に適切であるならば、心身の発達は疲労しないで助長されていくと思う。このように施設や設備という環境に幼児は左右されるので、この環境は幼児の発達助長の上にかくべからざる条件といえよう。

◎理想的な施設・設備とは

理想的な施設、望ましい設備といっても、広大な近代的なりっぱな建築も、すばらしい設備もあるであろうし、また規模は小さいけれども、幼児を中心とした点におい

て、理想的な望ましい施設も設備もあると思う。私は今回は後者について述べてみる。私は幼児を対象として考えるとき、幼稚園は幼児のための環境をつくることにあると思うと、幼稚園的環境は幼稚園の設備ということになり、恵まれた環境の中に生活させることが大切で、室内も戸外も幼児を中心として考え教師の工夫あっせんによって、遊びの場でいきいきした幼児の経験が行われるようにしたい。環境は工夫によってつくられまたかえられる。保育者は、環境の計画者であり、また環境の活用者で環境をつくるのはわれわれの任務である。したがって幼児が楽しい経験生活が行われるようにするためには、幼児ということを念頭に置いて、どういう設備をどこに備えたらどんなよい生活がなされるか、よい環境つくりへの水が、こんこんと流れているようにしたい。広い園庭もほしい。池も丘もほしい。しかし、そう望み通りにはならないから、室内にも戸外にも、できる限りのよい設備・環境を整えて、遊びたくなる生活環境が生まれて来るように、工夫につとめることである。設備、設備とうたにうたい、環境、環境と叫ばれても、さてほんとうによい環境がつくられているような設備ができているであろうか。つまり、

1. 幼児が生活しやすいように設備の工夫をする。
2. 教師も幼児とともに生活するのに都合のよいように設備の工夫をする。
3. よい生活態度が身につくように設備の工夫をする。

ことが望ましいのである。

たとえば手を洗うのに洗いやすいように手洗場の設備をしておけば、自然に手を洗うよい習慣が身について来る。

結局、装飾的なまたは形式的な設備より幼児の楽しい経験が行われて保育効果があがるような、実質的な設備をすることが望ましく思われる。

も一つ極めて大切なことで案外取り入れていないことは、放送ならびに視聴覚教育に関することであろう。目と耳の教育はこの時期にこそ養われたいことで、小学校へいってからではおそいのである。私はこの点に意を注いで左の設備のもとに基本的のことをしている。紙面に限りがあるので、保育室内の設備と音楽リズムの設備は省略し、遊園の設備と放送と視聴覚教育の設備を掲げておく。

1　遊園の設備

イ、給水、手洗い、足洗い兼池代用

ロ、運動機具および遊具

○砂場と砂場遊具いろいろ
○鉄製グローブジャングル
○鉄製すべり台
○鉄製太鼓橋
○鉄製ぶらんこ
○舟型シーソー　二台
○木製箱ぶらんこ
○空中シーソー
○鉄製キャッスルジム

○攀登棒・助木併用機具
○鉄棒　高低をつけて　三
○平均台
○ロッカー
○箱車
○バスケットボール遊具　二
○押車
○玉入れ　一組
○輪あそびの輪（大中小たくさん）

2　放送と視聴覚教育の設備

○暗幕＝四〇坪の遊戯室を暗室にできる
○映写のための大スクリーン
○テープレコーダー
○大型電蓄
○幻灯機とスライド　たくさん
○拡声機（遊戯室および各保育室にもそなえてある）
○暗幕なしで映写できるスクリーン
○エルモ16ミリトーキー映写機
○人形劇舞台と人形劇材料
○一五〇ボルトのトランス
○紙芝居舞台と紙芝居　たくさん
○各保育室に配電装置

なお、きわめてささやかではあるが、本年一月「こどもの　いえ」を新設して幼児の世界にそなえたので、それがどんなものであるかを、次に述べてみる。

◎「こどもの　いえ」

一、特色　1.　構造＝（普通の平屋建を二階建とし、寸法はすべて幼児の身長、坐高から割出してある。）

2.　色彩その他お伽の国を夢見て表現してある。

3.　配電も水道もひいてある。（スィッチとさし込みもついている。調理場も流しもついている。）

4.　自分の家である思い、自由のうちにも責任をもってする

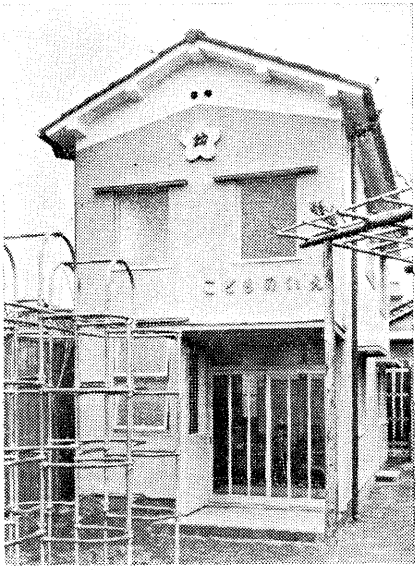
一、坪数

1.　下は洋間とままごとのへや＝約五坪

2.　二階は日本間と縁がわ付＝約二坪半

○このいえが出現したわけ

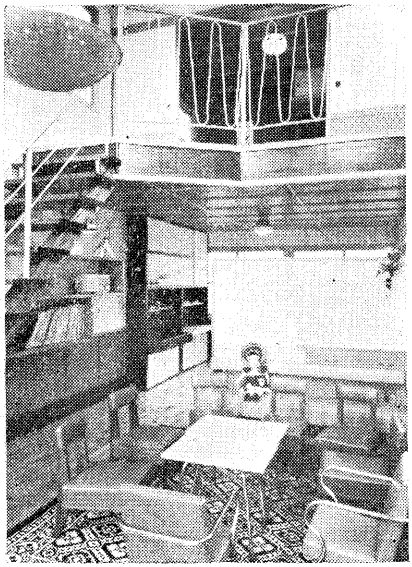
「こんな家ができたなら」そして「こんなにして暮したなら」と私の描いていた夢は随分長いことであった。考えていても、いろいろの事情のために、なかなか実現がむずかしかった。ところが、機熟したというのであろうか、昨秋十一月実現の幸運が授けられた。日頃本園の母姉会の方々と、このような夢物語りをしていたのであったが、子どもたちの福祉のために、毎月積立てて



いる、母姉会の積立金を私の夢の実現の資金に宛てるよう要請されたので、私は感謝に燃えて、一刻も早く建設して、園児たちが楽しく喜んで生活する姿を見たいと、心踊り、それからというものは、もう出来上って、幼児たちが楽しんで生活する生活振りを夢見るようになり、本年一月末までそれこそ一生懸命であった。

○「こどもの　いえ」の設備の概況と生活振り

誰が名づけ親ともなく、みんなの口から「こどもの　いえ」と名づけられた。洋間には模様入りのジュータンの上に桃色のソファーとテーブルと赤とコバルト色のビニールのクッションがついている美しいかわいらしい椅子のベビーセットが置いてある。つまり、洋風と日本風の生活の両面をとり入れたのである。階段よりの壁には、図書棚をつけ、そこには幼児向きの絵本を八十冊以上備えてあるので、ソファーや椅子に腰をかけてさも楽しそうな読書風景が展開され、愛らしさで、さながら子どもの天国である。また図書棚の一隅には、ラジオが置いてあるが、これも子どもたちが自由にかけてたのしんでいる。



ままごとのへやは天井の色を樺色がかった赤にしてあるが、見るからにお伽の国の家の感じがする。調理場も流しも繁昌する。フキン掛けもついている。戸棚の戸も、洋間とままごとのへやの境に立ててある衝立も全部、穴のあいている近代的なものでつくってあるので、適当に穴から穴へ必要な道具や花などをかけている。日本間には三畳を六畳敷にしてあって、床の間も床わきもついている。床の間の壁には幼児たちのかいた絵を入れた「かけじ」がかけてあるし、天井下の鴨居との間の壁にも横額がかけてあって、そこにも幼児たちのかいた絵が入れてある。またこの日本間には、ビクターのEP板もLP板もかかる電蓄やポータブルや、レコードケースや、お客さまごっこにつかう小さな折りたたみのテーブル五、脚と、ゆうぜん染の座ぶとんが十枚おかれてあり、茶だんすには、お客さま接待用の道具がいろいろはいっていて、お人形を抱いておかあさん、おねえさん振りも如才なく、お客さまごっこに余念ない姿にあふれる。

なお下と二階を通じて、一つ一つ趣の変った美しい笠の電灯が五個さがっている

し、ハトポッポ時計もかけてあるので、かわいい鳩が出て来る時刻には、時計の前に集ってポッポーと鳩が出て鳴くのを待って喜こんでいる。

この「こどもの　いえ」では、教師の支配も、大人の気分の圧迫もなく、幼児同志で、また自分で、それぞれ欲求する物や事にふれて、自分の心を働かせてたのしく暮らしているから、教師は遠くから見まもって、この雰囲気を破壊しないように留意しながら、よい相手役をつとめている。この家がこれ程までに幼児たちから歓迎され、喜ばれるとは実に予想以上である。この家へはいるのを待ち遠しがりまたはいったら出たくないと少しでも長くこの家にいたいと希望する。(園児が多いので交代してはいるからである) この家の構造も壁の色も、室内の塗ってあるペンキの色彩も設備してあるものも、ものいわぬ環境が、子どもを呼んでいる。明るくて、静かで、美しい室の中には、欲求を満足させてくれるものが、いろいろあって、しかも束縛なしに、持って遊べるので、活動がつぎつぎとつづくとともに、よい経験に伴ってよい学習をしていることは、自然の間に生む教育効果と施設・設備という環境について大なる関心をいだいている。

幼児嘶実演回顧記

(前略)　　平安短大保一B　A子

子どもにお嘶をしているときは、何もかも忘れてしまう。子どもたちは、お嘶をしている私に、一刻のすき(本人傍点)をも与えることを許さないから、忘れなければならなくなるのである。

近頃の私は、だれと話し合っているよりも、子どもと話し合っているときが一番幸福なのである。(大意抄記「回顧」の題意に適格例)

〔鑽〕すきを充たす一心が、彼我一体に結ぶお嘶の「場」である。

幼稚園の朝の新味と、保母の慰労に満足する純情交感の場と、倉橋先師の「自由感」がここに躍動している。

「幼稚園真諦」32頁「茶人の悠々たる生活」は、保育者と幼児との語り合う純なるお嘶においてこそ、最も能く発揚される。優良なる実演を観て、幼な心に同化された印象を、地上に楽園をもたらせる至宝として鑽り下げて行きたいのである。(三二、二、一九、十一時五十分記)

大塚喜一

教育計画とその実践

大阪市立常盤幼稚園

広岡キミエ

私たちのカリキュラム作成の動機は、基準的なカリキュラムへの疑問から出発したのでした。かって私たちは他の人の作ったカリキュラムの主題にしたがって保育していたときがありました。当時（七、八年も前の）これらの基準的なカリキュラムというものは、教育的なねらいが確かで、妥当性があり、だれでもが安心して用いられる外形を備えていますのに、その実、用いてみると何かピタッとこない、子どもを力いっぱいに動かしきれないという不満を感じるのでした。ことごとにひっかかって、これは何だろう？　なぜこれをしなければならないのだろう？　というようにばかり考えさせられてしまうのです。たとえば、こんなことです。

五月の単元に「私たちのからだ」というのがありました。そこでは、自分の身長や体重や四肢のことに関心をもつように遊びを導き、健康的な習慣や心くばりまでができるようにと高い目標が打ち出されてあるのですが、この頃の子どもは庭の隅でぢむしを掘ったり、毛虫を集めたりするのが一等好きで、なかなか私たちの願いとするからだのことにはいるチャンスがありません。身体検査をした日は、からだについて話しあうことができますが、そんなことは、三日も四日も続くものではありません。そこで毛虫のことから人間の手足に話を移したりしてみますが、その露骨なこじつけには、われながらわびしくなって、なぜこんなにまでしてこのテーマにはいらなければならないのか、と考えさせられます。いったい、健全な子どもが自分の手足をマジマジとみて、その存在を問題にするというようなことがあり得るでしょうか。胃や腸の存在を自覚しない人が最も胃腸の丈夫な人であるはずです。それよりも子どもは、もっと手足を力いっぱい動かすことに忙がしくなくてはならないのです。自分の健康管理ができるのはおとなのことで、子どもはそばから管理してやらなければならないものでしょう。もちろん、健康を保てるような良い習慣はおとなの工夫で子どもの身につけてやらなければなりません。けれども余りそのねらいが強力に、なまで打ち

出されていると、子どもの自然な姿が押しつぶされてしまうのです。余り末端まで細かくとりあげられていると、つい保育者が思いちがえて末梢的なことに拘でいしてしまうのです。しかしこうした教育的ねらいの強力さだけではなく、子どもの興味から出発したのに何となくすれちがってしまう場合も少なくはありません。たとえば、垣根いっぱい美しくクライミング・ローズが咲きました。アッと目をみはるばかりの美しさです。そこまでは先生も子どもも同じです。しかしそこから観察だ、お話だ、歌だと押しつけていき、最後はりっぱな製作に残さなくてはおさまらないというようなことになるともういけません。お花などという静的なものに、子どもはそれほど興味をもってはいません。むしろこの美しさが、子どもの心の奥深くにやきつけられるのは、最初の一瞬あっ！　きれいと思ったときなので、あとへいろいろと因縁をつけてひっぱると、逆効果になるような気がします。こうしたズレは何でしょう！　教育目標というものに余りかたくとらわれたり、先生的入念さが、あれもこれもと細かい注文や注意をつけ過ぎることによって、ついに子どもの興味から逸脱するということなのでしょう。それはまるでご主人さまをぬきにして料理自体を大こりにこっている料理人みたいな気がします。芸熱心と善意から出たことにはちがいないのですけれど、当のご主人さまのためには、少しもなっていないということなのです。片っぱしからこういうつまずきを覚え出して、一年間を辛うじて過ごした私たちは、とうとう思いきってこうしたテキストを捨てました。

子どもの興味を先頭に立ててあとからついていくことにしたのです。しかしよりどころとなる一貫した筋をあらかじめ持たないということは冒険でした。でも私たちは恐れながらもただ今日にすべてを賭けました。今日のいのちをあらん限り燃焼させつくすのだ、その推積が良き明日なのだと信じました。本気でした。一日もおろそかにはできない思いでした。子どもも先生も精いっぱいであったかということだけを反省して、一日済むごとに、その日の記録をつけていきました。こうした生活の内には、不安と混乱がいつもありました。しかしまた、子どもの本気さ、つまり一個の人格として対等に向かいあえるような子どもの姿に出会う喜びをも、たびたび体験しましたので、私たちは忍耐することができました。幸い保育者たちはみなベテランで、保育を後生大事にする人たちでした。第二年目も同じで去年の記録をさえ見ないで、ただ子どもをだけみて歩きました。何か去年の記録が参考にならないような気がしたのかも知れません。それでも一日一日の記録だけは怠らずとっていました。こんな保育は、一見気まぐれのように見えたり、行きつ戻りつしますので、なかなか一貫した筋には通りにくいので、まとめあげることができずにいました。だけど、ときどきわれながら筋道が判らなくなって、始めから考えなおさなくてはならなかったり、他から計画性がないようだなどと詰めよられると、その説明がなかなか困難でじれてしまったり、当惑したりもするのです。私たちは、子どもの遊びの効果を現在子どもが新鮮でいきいきしているかということ、この遊びが生涯の何に連らなるのかと考えることで決めてきていました。たとえば、絵をちょっとも描かない子があっても、私たちは、そう性急に描かせようとはあせりません。砂場や積木で、ドンドンものを創ることのできる子なのです。あるいは、リズム表現でドンドン自分を出していくことのできる子なのです。絵を描かな

い理由はきわめてつきとめておきたいことではあります。(案外つまらないことがひっかかっているのかも知れませんし、思いもかけない大問題を掘りあてることができるかもしれません)だけど、今絵を描かないから不具だとか、生涯の生活がアンバランスになって不幸だとかいうことではないでしょう。もっとも、自然な子どもの願いというものは、いつもしめくくりなく流れていることを好むものでは決してないこともよく判ります。子どもは精いっぱいを試したがっているし、伸びたがっているのです。それでこそ、私たちがグンと踏み込んで指導する場があるのです。大体こんな考えなのですが、余りぼうぜんとしているので前述のように、ときどき不安になるのです。思いきってまとめよう。そしてわれひとともに、しっかりした筋道を確認しようと決心したのが五年目でした。毎年とめどなく変っていたようでしたけれど、四年分の記録を集めてみると、一応まとめることができました。それだけに、何だ、こんなものかと、その平凡なことにもちょっとがっかりしました。そうです。カリキュラムの動いてはならない部分と、動いて動いて絶えず新しく変らなければならない部分のあるを知ったわけです。

自分で立つ。

自分でものを創る、考える。

ともだちと仲良く遊ぶ。

ということを私たちの保育のスローガンとしているのですけれど、この目的が不動である限り、そして、この年齢の子どもたちの共通性に足場をすえている限り、単元目標というものは動かぬものがつかめるわけです。それで、単元をできるだけ巾広く大きくとり、その中に多くの主題がとりこめるようにしました。単元の目標からそれない限り、各組は、保育者の個性とその場の子どもとの生きた結びつきから常に新しい主題がとりあげられるはずです。その主題のもとにいろいろの資料が拾われていくわけです。この資料は常に新しく動いて流れていきますから、掲げても意味のないものですし、掲げきれないほど複雑なのですが念のため、資料例として集めてみました。試みに年間の単元表を掲げてみましょう。

	単元	単元目的	期間 月	期間 週	主題
Ⅰ	楽しい幼稚園	(1)幼稚園生活になれさせる。 (2)同年齢の仲間生活に気づかせる。 (3)幼稚園生活に楽しみを覚え進んで登園するようにさせる。	四月	第二～第四	幼稚園 お友だちと遊ぶ チウリップ
Ⅱ	元気に大きくなる	(1)遊びが少しずつまとまり表現活動が活発になるようにしたい。 (2)季節の小動物と親しみ季節感を味わわせる。 (3)梅雨期も楽しく無事に遊ばせたい。 (4)健康生活の良習慣を得させる	五月 六月	第一～第四 第一～第三	鯉のぼり 初夏の小動物 身体検査 つばめ 時計 梅雨など
Ⅲ	夏が来た	(1)活動的な夏を楽しく迎える。 (2)夏の遊びが元気にできるようにする。 (3)夏休みを豊かに送れるよう準備する。	六月 七月	第四～第三	海 七夕さま 水遊び等

Ⅳ	第二学期が始まる	夏休み中の心身のゆるみから脱して規律ある集団生活を早く回復させる。	九月	第一～第二 夏休みの報告 トンボとり（蟬）
Ⅴ	戸外で運動する	(1)戸外遊び、リズム遊びを中心にして身体の充実をはかる。 (2)秋の自然にふれさせる。	九月 十月	第三～第四 虫捕り 外遊び 第一～第三 競技 運動会
Ⅵ	製作する	(1)自分で工夫しながら力いっぱい製作する。 (2)協力してものをつくる。 (3)忍耐して完成する。 (4)秋から冬への自然観察。	十月 十一月 十二月	第四 美しい秋 第一～第四 冬が来る 第一～第三
Ⅶ	冬の遊び	(1)お正月の余韻を楽しむ。 (2)進学をめあての第三学期の良いスタートとする。	一月	第二～第三 冬の遊び
Ⅷ	劇遊びをしよう	(1)持っている表現能力の全部をあげて総合的な一つの仕事をまとめる。 (2)多くの友だちと協同して大きい仕事をまとめる。 (3)小学校へ上る希望と自信をもたせる。	一月 二月 三月	第四 本読み 第一～第四 鬼の遊び 第一～第三 お芝居ごっこ 卒業

こんな単元表のもとに各保育者が自由に繰りひろげている保育の実際を記してみましょう。

一年保育の四組について書きましょう。

単元七　冬の遊び（一月第二週記録）

組	主題	表現活動 言語	音楽リズム	絵画製作	自然	健康	社会
A 組	お正月遊び	本読み（シンデレラ姫） かるたとり 幻燈 三匹の子豚	表現 まりになる 凧、羽根	すみ絵 お正月の遊び	霜 風 朝霧 水たまり流行につ りの氷いて 外遊び奨励	うがい（洗面）の励行 はしかの	冬休みのお約束は守れたか 寒さに負けずに登園する
B 組	お正月遊び	お正月の話し合い お話 凍る爺さん 霜坊主 幻燈 三匹の子豚	唱歌 〃子どもは風の子〃 〃うなるようなる〃 表現 お正月の遊び こま、凧、羽根 レコード 三匹の子豚 トイ・シンフォニー	なし	霜（平均台上） 水道の氷 凧（凧あげ）	手洗い後よく拭うこと しもやけの話 外遊び	早寝、早起 同右
C 組	お正月の遊び	本読み（ブレーメンの音楽隊） （イソップ物語） 話し合い お年玉、凧あげ 十日戎 お話 和尚さんとお餅 幻燈 三匹の子豚	唱歌 〃たき火〃 〃風の子〃 リズム 表物 こままわし 羽根 動き スキップ	クレパス画 お正月の遊び 落画場	雨	うがい 鼻かみ	お正月の遊びを友だちとする 手袋、オーバーのしまつ 室内遊びを静かに

第三学期の出発はこのように大体同じです。単元の変った第四週を掲げてみましょう。

単元八　劇遊びをしよう（一月第四週）

組	主題	表現活動 言語	音楽リズム	絵画製作	自然	健康	社会
A	劇遊び	話し合い 霜のこと 人形芝居のこと お話 霜の兵隊 りんご十個 おばあさんと豚 劇遊び 「りんご十個」 「おばあさんと豚」 ペープサート	唱歌 〝風の子〟 〝たき火〟 〝お月さま〟 リズム 表現 リンゴになる ゲーム 角力	クレバスで描く 新人形をつくる	霜を継続的にみる	朝の洗顔 角力ごっこ	隣の組と合併で遊ぶ 他の組のペープサートをみる
B	ピノキオ	本読み（ピノキオ） 継続して 劇遊び 「ピノキオ」 読んだだけずつ	唱歌 〝寒い時〟 〝山火事〟 リズム 動き 氷すべり	ピノキオの芝居に必要な道具 かつら、赤い鼻 ピノキオ	霜 道の氷	手洗いの後よく拭くこと 鼻をかむ事を徹底させる	遊具を分けあうこと 協同してすること

組	主題	表現活動 言語	音楽リズム	絵画製作	自然	健康	社会
D	お正月の遊び	話し合い お正月に遊んだこと 十日戎 幻燈 三匹の子豚 劇遊び 三匹の子豚 紙芝居をする 三匹の子豚	唱歌 〝たき火〟 〝バラバラ落ちる〟 雨、雪、星 リズムバンド 〝カッコウワルツ〟 ハンドカスタ タンバリン	クレバス画 〝お正月のこと〟 紙芝居を作る	風（凧あげ） 霜 氷	厚着をしない 外遊びを元気にする	お正月の生活の不規則さからぬける 早寝、早起 できるだけ多くの友だちと遊ぶ

組	主題	表現活動 言語	音楽リズム	絵画製作	自然	健康	社会
C	劇遊びをしよう	対話していく 本読み（ヘンゼルとグレーテル） 継続して お友だちのお話を聞く ペープサートを見る 紙芝居（ペープサート）等を演る	（トイ・シンフォニーによる） リズムバンド トイ・シンフォニー 自由打ち 太鼓を使う 唱歌 〝三匹の子豚〟 〝風の子〟 〝とびはねろ〟 リズム 三拍子で動く ゲーム 角力	を壁画で表現する ポスター カラー ピノキオのお話を描く 絵 三匹の子豚のお話を描く 積木（菱の家） （木の家） をつくる 煉瓦の家 ペープサートの舞台を作る ペープサート、紙芝居作り	ミルクの用意に気をつける	角力ごっこ	他の組のペープサートをみる 協力的な仕事に気づく	一人で登降園する

組	主題	表現活動 言語	音楽リズム	絵画製作	自然	健康	社会
D	お芝居ごっこ	本読み 親指姫 ペープサードを演る 〝三匹の子豚〟 〝七匹の小山羊〟 （レコードに合わせて人形を動かしセリフをハッキリ言う）	唱歌 〝小雪に小枝〟 〝たき火〟 リズム 表現 三匹の子豚 動き 三拍子の動き ゲーム ケンケン鬼ごっこ リズムバンド カッコウワルツを拍子で変化	ペープサートの人形つくり バックを描く 三匹の子豚 七匹の小山羊		外遊びを元気にする	ペープサートをして小さい囲いの中でうまく協力とて仕事をする経験をさせる 別の組に見せる	

D組は当園唯一の二年保育年長組で、この組に一月第三週目にたい頭したペープサートが次第にひろがって、他の組に影響を与え出しています。それはある日、他の組を招待してみせたことからです。（ここにあがっていない他の二組も影響をうけています）ただ一組ピノキオをしている組だけは影響を受けていないのもハッキリしています。とにかく、どの組も劇遊びの方向にむかっています。もう特定の題材をつかんで進んでいるのもありますし、まだハッキリした題材に取りついていないところもあるようですが、第八単元の目的にそうように押し進めて行く意図がよく見えます。第三学期は、大きな題材にいどんで一つのものを長く深く突込んでいくのが特長です。少しとんで二月第三週の例をあげてみましょう。

単元八　劇遊びをしよう（二月第三週）

組	主題	表現活動 言語	音楽リズム	絵画製作	自然	健康	社会
A	劇遊び（りんご十個）（お山の鬼）	本読み（金の木、銀の木）（ジャックと豆の木）お芝居ごっこ（小グループに分けてみせあう）りんご十個（年少児）お山の鬼（年長児）	唱歌〝節分のうた〟〝たき火〟〝風の子〟リズム動き ポップバランス 表現 雪 ゲーム お山の鬼ごっこ	鬼を描く 鬼の面作り 鬼の城門をつくる	暖かい日 雪 みぞれ	ひるねを静かにする 薄着を励む 朝の顔洗い	ひるねの用意と後片づけ
B	劇遊び	本読み（ピノキオ）続き最後まで（瓜子姫と天邪鬼）	唱歌〝森の子ども〟〝雨、雪、星〟劇笛ふきの滝ほか	劇遊びの道具をつくる 舞台装置	雪空		協力して完成する

組					
	（どんぐりと山猫）	鬼）	リズム動き 三拍子でかける ころがる しゃがんで歩く ゲーム 栗の木の下で リズムバンド ジングルベル 風の子 葺の楽隊をする（指揮の工夫）	いろいろ 小道具のいろいろ 標識 葦の笠 壁画 山猫 一郎 栗など	雪がふる
					後かたづけをよくする

組					
C	劇遊び（三匹の子豚）	本読み（アルプスの山の少女）（三匹の子豚）話し合い 三つの家について お話リレー 三匹の子豚を八人で 声だけの芝居 テープレコーダを使用	唱歌〝橋の上〟〝山の音楽家〟（輪唱）（指揮で歌う小太鼓を入れる）リズム 三匹の子豚（野原へリンゴをとりに行くところ）	木工 煉瓦の家 ヴァイオリン 他の楽器をつくる	雨降り 暗い空
D	お芝居ごっこ（小雪と小枝）	本読み（グリム童話集）対話 お芝居の中の対話の部分 暗誦 メリーさんの羊 お芝居「松の木の願い」	唱歌〝小雪と小枝〟リズム レコードに合わせて動く（小人の出） リズムバンド カッコウ・ワルツ（ハンドカスターで）	お芝居の為の製作 厚紙と木工 松、杉、柊など 柴っぱのいろいろ（金、銀、カラス）の工夫	雨降り 雪
					外遊びを元気にする
					一つの芝居を始から終りまで自分たちの手でつくりあげる 協力の楽しさを感じさせる

組						
				舞台の装置を試したり工夫したりする		

どの組もだいたい劇遊びの大詰めです。一つの劇の主題にからまりついて、そこから汲みつくせるだけのものを汲み、打ち出せる限りを出そうとしています。どこもみんな、キューッと集中しています。D組だけがお芝居ごっこをしていますが、本当に、ここだけは他の組とは少しちがった遊び方をしています。芝居というものを全部子どもたちの力で組み立てているのです。舞台の構造も、人の出し入れも、レコードや拍子木を入れる箇所も、語り手のことばまで自分たちで考えてやりました。こうして一週間後には、卒業記念の発表会にもち込んだのですが、一つ一つみなたいへん力のこもったものであることが見えました。それは、猿芝居の無味乾燥な反復練習の結果のうるわしさではなく、生きて歩み続けた里程の重みなのです。こうした厚味が子どもの内にもできることを私は初めて今年経験しました。どの子もみな充実感から来る落ち着きとハリを自然の姿の中にもっていたのです。

これが私たちの保育一年の成果だと正に感じました。

名古屋私立青葉幼稚園

山口たつ

教育の計画は、常に実践の場である幼稚園自体の地域環境と、人的構成を基盤として、建てられなければならないと思う。

そこで我が園の地域環境と園児の性向について少し述べてみよう。

位置、東山動物園の西方、丘陵地で別荘、住宅地帯、附近には灌木雑草が繁り、四月頃には全山山つつじにおおわれ、保育室の窓ガラスも紅に映える美しさ、五月頃の新緑、そのあざやかさもまた一しおである。このように自然環境には恵まれております。子どもたちは、日々頬を紅潮させ、息をはずませて、坂道を馳けあがって来る。清澄な青空が子どもたちにほほえみかけ、都会の騒音の中にある園に比べれば別天地の感があり、この恵まれたこの環境をいかに保育の上に生かしていくかということだと思う。

家庭環境は、俸給生活者がほとんどで、文化的水準の高い中産階級の両親は、子どもの教育に、深い理解と、熱意を示している。園児のうちわけは、左のごとくである。

年長組　一〇五名　男　六〇名　女　四五名

一年児　七〇名　男　三五名　女　三五名

二年児年長組　三五名　男　二五名　女　一〇名

年少組　四五名

二年児年少組　男　三〇名　女　一五名

幼児の性向は、こうした地域家庭の環境をバックとして、育てられた子どもたちは、知的に相当つめこまれているが、身体的活動

は、あまりそれに伴わず、正常に発達していない。頭デッカチな子どもが比較的多く、神経質で、感受性の強い傾向を見受ける。反面素直で、明るく、人なつっこい性質を持っている。

教育の計画と方針

「方針」

運動能力を高揚し、頑健な身体を作る。友だちと協調して仲良く遊ぶことのできる社会性を養い、我慢して一つのことをやりとげる強い意志力をつちかいたい。感謝と謙譲の心の芽生えをつちかいたい。

「計画」

1　年間計画を四月の始めに全職員協議の上この方針にそって立てる。

2　月間計画、週案、日案は各職員が、各組の実状をよく考慮して立案する。それを毎週金曜日の打合会で協議して、横の連関をはかる。

3　週案の抜すいしたものを、家庭へ土曜日に印刷して届ける。一週間の幼稚園のあり方を理解して、協力していただく。左に一例を示す。

○来週の予定をお知らせいたします

3月 日	4 月	曜	白組	青組	赤組	通信事項
	うとんべお	とうべん				
	休園（代休）					
	同上					
	同上					

5	6	7	8	9	事予定
火	水	木	金	土	三日(日)おひなまつり遊戯会 四日(月)代休 六日(水)教養講座　大教授名 大西誠一郎先生 八日(金)一日入学
給食	おやつ	おべんとう	給食	おやつ	
一日入学 東山小学校	ひなまつりの絵 水彩画	既習歌曲のおけいこ 一番すきな歌　遊戯	好きなものを作りましょう 製作自由	学校ごっこ	
同上	同上 クレパス画	同上	同上	同上	
器楽合奏 子どものダンス 蝶々	同上 クレパス水彩併用	同上	紙細工 好きなものを作りましょう	お舟を作りましょう 薄板製作	導目標
九時半園発 十一時帰園 二時限見学 入学			木片、ボール空箱、針金、布切れを持参させて下さい		○人にたよらず自分の事は自分でしましょう

3月行	生活指
一一日(月)体重測定 一二日(火)お別れ遠足(鶴舞公園) 一四日(木)PTA誕生会 一六日(土)園児誕生会 一九日(火)卒業式	○集会の時の礼儀作法を正しくしましょう ○鼻をかみましょう ○うがいをしましょう

とくに生活指導の面で、家庭の協力を願うわけである。

一週は大体六項目にそって、一日の主題を定める。

月曜日　「言語」生活発表などを通じて言語の習練をする。

火曜日　「絵画」いろいろな材料を与えてのびのびと描かせる。

水曜日　「音楽リズム」歌曲、リズム表現、器楽合奏などをさせる。

木曜日　「自然、社会」一週間交替にする。

ごっこ遊び、社会見学、自然観察、草花の手入れ、動物の飼育などをする。

金曜日　「製作」　いろいろの材料を使用させて創意工夫して製作に当るようにさせる。

土曜日　「音楽リズム、絵画製作、言語、社会」

この項目に、三教室を区分して、それぞれ研究している先生方に、所属してもらい、プランを立てておいてもらう。全園児が自己の好むところに、所属して、作業をさせる。三組を解体して、保育をする。担任教師のみでなく、どの教師にも、親しみと信頼と尊敬の念を持たせるため、教師も全園児の名前をしっかり覚えて、どの子にも親しく接し、導くことのできるようにさせたいために、実施している。

当園においては、戸外遊びを、とくに奨励している。自由遊び時間の幼児の戸外遊びは、いろいろな運動器具、遊具を使用して、活発に活動を展開できるように、配慮している。

「PTA、母の会　の運営」

十五日を、毎月定例母の会として、保育参観をしてもらう。参観後三十分間位、園長が、教育内容六項目について、一項目ずつ説明し、当園ではどのようにしているか、ということを話し合う。そして、正しい幼稚園教育のあり方を理解してもらう。七割以上の出席率で、熱心に参観される。

毎学期一回、個人面接を行う。一人三十分間宛、懇談をする。家庭における幼児の生活態度を尋ねたり、幼稚園における態度を、聞かせたりする。こうすることによって、幼稚園に親しみと、深い関心を持たせる。できるかぎり、正常な眼で、冷静に子どもを観察していただくように、努力している。

立案された教育の計画を、効果的に実践、徹底させるためには、どうしても、幼児と一番接触する時間の多い母親に、積極的に働きかけて、その人の理解と協力を得なければ駄目だ、と私は信じて、母親教育に重点を置いて、昭和三十一年度は、努力してみた。その一方法として、「PTA誕生会」というものを設けた。その様子を次に詳述する。

「PTA誕生会」

出席者　その月誕生日を迎える幼児と、その母親、教師。

日時　毎月二十日を定例日として開く。午後二時から三時半頃までする。

母親に招待状を出し、その月の誕生児の数により、バースデーケ

ーキを注文して用意しておく。

円形に座を取り、親子並ぶ。だれの顔もよく見えるようにする。談笑することのできるようなふんいきを作る。司会は教師が、当番で、順番にする。

1　お祝の歌を全員で歌う。

2　園長が、お祝いの挨拶を子どもと親にする。

3　談笑のうちに司会の教師の指名によって、一人ひとりの母親に、子どもの生まれたときの様子をこまかく話してもらう。幼稚園にはいるまでのいろいろなくせや、性向について話してもらう。エピソードをまじえて。

「生れたときは九百匁もありましたので、なかなか生まれにくくて、難産でした。毎日人手もないので、誕生近くまで寝かせてばかりいましたので、足もおそく、ものもちっともいわないので、おしではないか、と心配しました。」

4　お話しが全部すむと、バースデーケーキを、テーブルに配置し、紅茶を入れ、先生がケーキを切ってお皿に取りわける。

5　ケーキや紅茶をいただきながら、幼稚園における子どもの生活態度のいい面を、強調して話し、子どもたちに成長の喜びを味わわせる。

6　子どもたちが、「大きくなってありがとう」の歌を合唱し散会。

大体以上のような順序でする。小人数の母親の集まりなので、どの方とも、楽な気持で、親しくよくお話ができるので、一人ひとりの母親の気質も、全職員にのみこめ、子どもの生い立ちもよく理解され、子どもたちも、ほんとうに、お誕生の喜びを心から味わうことができたようで、成功だったと思う。

教育の方法について少し述べてみる。

「一学期の保育形態」

一斉保育的取り扱いを多く取り入れ、集団生活に早く馴れさせる。

一、毎朝自由な形で、園庭に参集させ、幼児体操をする。

四月中は大体新入園児は見ているが、漸次その中に、導入されて、リズムに合せて、簡単な動作からするようになる。五月には揃ってできるようになる。（五分）

二、レコードに合せて、歩く、跳ぶことなどをして園庭を一周する。（五分）リズムに馴れさせ、自然にリズムがとれるようになる。

三、保育室にはいり、休息後、一定の保育活動にはいる。（二十分〜三十分）

自由遊びの時間を、充分にとらせるように、配慮している。自由遊びの時間には、集団的な遊びを、教師が仲間にはいり、中心になって、誘導する。遊び方を知らせることと、友だち同志が、親しくなるように留意してする。「花一匁目。ロンドン橋、竹の子など」

「二学期の保育形態」

一、月木土　園庭に全員集合、幼児体操をする。

二、月　一週間のお約束をする。週間中の行事について説明する。

木　お約束が、よく守られているかよく反省させる。

土　一週間の反省をさせる。日曜日の爪切りの約束をさせる。（三分〜五分）

三、火　金　登園した子から、各組ごとに、担任が、自由な保育活動に、誘導していく。

四、水　全園児が、登園したら、自由に、四つの保育室に分かれて、グループ活動をする。年長組と年少組が合流してする。音楽リズ

ム、絵画製作、言語、社会、自然の四項目に分れ、それぞれ教師が自己の研究課目を担当して、指導にあたる。園児が、どの組の教師にも、親しみと、尊敬の念をいだかせることと、どの組の子とも、仲良く、協力して、作業することのできるようにさせたいためにこの方法をとってみた。

五、土　遊戯室に全園児が、集合して、音楽リズムを中心とした遊びをさせる。

各保育室は、オルガンでしているため、ピアノにより、正しいリズムのとり方を、把握させる。集団で友だちのすることを、静かに、見たり、聞いたりする習慣形成を、大勢の友だちの前で、憶せずするという、積極性、社会性を培うために実施している。

「三学期の保育形態」

一、月　木　朝、集会して、体操させる。

正しく整列してする。大勢集ったときは、速かに、静かに並ぶという習慣を身につけさせる。

二、火　金　は二学期の形式に同じ。

三、水　土　遊戯室で、全員でリズム遊び、器楽遊び、劇遊びなどをする。

三学期は、一年生に進学する幼児が、全園児の三分の二を占めているので、小学校の学習形態を取り入れ、一定の時間（三十分位）部屋の中で作業するように、カリキュラムをくんでいる。大きな集団で、活動することもできるように考慮している。ごっこ遊びも、全員で、それぞれの持ち場を決めてする。

「学校との連絡提携」

全員、東山小学校という、連区の学校へ、入学するので、連絡には大変都合よく、密接にできます。

「進学座談会」

一年担任の先生に全員（八名）出席してもらい、進学する子の母親との懇談会を開いていろいろ話し合いをする。

1、幼稚園から来た子どもの特徴、長所、短所。

2、文字の問題、数の問題。どの程度に、教えておくか。

3、給食の問題。

4、用具の問題。　など

「一日入学」

就学する園児を全員小学校へ連れていき、一日、一年生の子どもといっしょに生活させてもらう。八組あるので、八つのグループに分けて、各教室の一年生のお友だちと、いっしょに絵をかいたり、歌をうたったり、本を読むのを聞いたり、紙芝居を見せてもらったりして、すごす。

校長先生から「四月みなさんのくるのを、みんなで待っています」という、お言葉をきいて、もう一年生になったような、誇りと喜びを、かわいい顔にうかべて、幼稚園に帰って来る。帰るとすぐ、グループに分れて学校ごっこをして遊んでいる。算数の時間、国語の時間、図画の時間、音楽の時間、体操の時間などといって、楽しく遊びに再現する。

「入学期の幼児を持つ母親の心構えについて」

心理的立場から、専門家の先生にお願いしていろいろとお話を伺う講演会を持つ。そして、充分な心構えを作ってもらう。

子どもたちが、四月から入学して、安定した気持で入学し、学習に励むことのできるよう、温く見守るようにしている。

西桜幼稚園 研究集会報告

(32.2.8～9)

樋口澄雄

一、この研究集合の趣旨

研究会をどのように持ったらいいかについては、さまざまのことが考えられると思います。が、何とかして、自分たちの力で、同志によびかけあっての、いわゆる下からのもりあがりとしての研究会を持ちたいものだと、私たちはひそかな、そして年来の希望を持っていました。

頼まれるのでもなく、すすめられるのでもなく、自発的にやる。こんな態勢を作りあげていくことが、私たちの任務のような気もしていたのです。

そのことは次のような案内状になったのです。

「新教育が発足してから十三年目になります、早いものです。

しかし最近は、その第二段階を示す様相がしばしば見受けられるようになってきました。

このとき、教育のことを思う、みなさまと相会して、これからさきのことなど語りあって、はげましあったらどんなにうれしいことかと思っていました。

そこで意を決して、ささやかではありますが、私どもの学校のしごとを素材に提供して、そうしたときとところを持ってはと考えました。

おいそがしいときです。寒さもきつい頂上ですが、何卒私どもの意をおくみとり下さいまして、新しい教育の進展のため、みなさま誘い合せ、一人でも多く、この広場にお出かけ下さいますよう、心からお待ち申します。」

私たちは、今もこの考えを捨てていないのですが、何とかして、私たちの受けもつ子どもを少しでもよく伸ばして幸福にしてやるために、私たちの力の結果を私たちの力の及ぶかぎりでやってみたいものだと思います。

私たちは、うえられた鉢のばらより、土手に萠え出るふきのとうに大きな魅力と、そして、根づよい力を発見するからです。

二、おみせしたこと（授業者宇津木綾子、井部幸子、小山法子、佐佐和子）

二月八日（金）九日（土）の二日間。朝九時から五十分間授業をいたしました。

松、竹、梅の三学級は乗り物ごっこ。梅組だけは初日に冬のあそびという音楽リズム、二日目は他と同様の乗り物ごっこでした。

単元は、乗り物あそびで、どの学級もちょうどそれにはいっていましたので、乗り物ごっこを中心に展開したわけです。

題目は同じようでしたが、中味はそれぞれちがった角度でした。というのは、私たちの園では、共通の単元は持ちますが、展開は各自創意をもって、学級に合うように行うことを本体にしているからです。

この部分の紹介が、十分できないことは残念ですが、主として行われたことは、子どもたちの創意と自発活動を重んじて、あ

る学級は大型の積木で部屋いっぱいの乗り物を、ある学級は木工などで作った乗り物を、またある学級は既成の動く乗り物を使ってというように、いろいろの角度で展開しました。これは作為でなく、学級の展開の流れにそったものでした。

そして、私たちは、果してこういうことでよいかを研究の一つのメドにもしてもらいたかったのです。というのは、展開のねらいさえ共通なら、展開されるしごとは、学級によって、かわってさしつかえないと思っているからです。画一的な考え方を打ち破って、学級教師が思う存分動けるようにするところに教育の創造的発展があると考えているからです。

三、提案とその考えの源（提案者　早塚　文）

私たちは、分科会を三時間に亘って持ったのですが、それは、集った方々がみなさん十分思う存分にいいつくしたい念願からだったのです。

そこで、この分科会への提案に何を持ってくるかについて考えました。

第一は授業それ自身より、その底に流れている考え方、それを問題に出したらと考えました。

第二には、幼稚園段階においてのいちばん強くねらわなければならない問題点を明確に出して、それを真正面からとりあげようという態度をとりました。

第三には、少々むずかしくても、理論的に追求することによって、幼稚園教育の骨ぐみに一歩でも前進できる問題をとりあげて、いこうとしました。

そこで提案となった問題は、

「幼稚園で、社会集団の意識と行動をもりあげていくのには、どのようにしたらよいか」

というものでした。

提案の理由は次のような考えにもとづいているのです。

私たちは、幼稚園教育を、家庭教育の延長とは考えておりません。家庭生活に基盤をおく子どもたちを教育することにまちがいはありませんが、園という集団生活による教育場が幼稚園だと思っているのです。家庭の母親のするしごとを園が肩がわりしてやるものだと思っていません。そうした部分は当然はいってくることですが、主旨はそうしたものでないと思っています。このあたりが、保育園とのちがいの根本だと思っています。また初期の幼稚園とのちがいもこの辺にあるのだと思っています。

それでは、幼稚園の基本的なねらいはどこにおいたらよいかということになります。

私たちは、こう考えるのです。園という集団によって、子ども一人ひとりがその集団の中に正しく位置づけられて、社会的に目が開け、その社会集団の中で他人との関係を意識して、その上に立って、自己を発見していくことだと思います。

もちろんその自己発見という中味は領域にわかれて考えられます。いわゆる六領域に亘るさまざまの教材は、この自己発見のために提供されるものだと思います。しかし、どこまでもこの自己発見は、集団の中で、集団を意識においてなされなければ、幼稚園の意味がないと思うのです。

こんなことを考慮において現在の幼稚園教育を考えますと、この集団の意識を育てることにもっと関心をもって研究を進めていく必要があると思いました。そこでこの問題を真正面からとりあげることにしたのです。

家庭での生活では、子どもたちは、家族内乃至近い親戚および近所の友だちといったごく限られた狭い範囲の交友関係しかあ

りません。またそのふれ合う内面的な関係は、家族を除いては、ごく浅いものといわなければなりません。その上、この頃の子どもの発達程度を考えてみますと、まだ社会的に目が開けず自己中心でものをみる頃だと思います。したがって、園にはいってまいりましても心は各自の家族の最も深いつながりを持つ人たちに強く結ばれていて、園の社会集団の中に自分をたしかな位置づけをしていないと思います。

ここに幼稚園教育の大きなねらいの穴が見えるように思います。

このことについて私たちは次のように表現いたしました。「入園当初の群的あり方から、しだいに集団的な考え方や行動までにひきあげていきたい」と。

で、この群から集団へと高めたいという考え方が、社会集団の意識と行動といった意味なのです。

すなわち、家庭人につながる自己中心的な子どもたちが、園という集り、学級という集りの中にはいってきても、その意識も行動も「むれ」的であるとみているのです。

個々ばらばらの考えに立っているときは、多ぜいの人が集っていても、それは単なる集合体で〝群〟とよぶべきものだと思うのです。同じ目的地にいくために同じ電車にのり合せても、その中の乗客は〝群〟であります。

同じ目的で幼稚園にはいってきても、その個々の子どもたちの関係は、実は群なのです。

これを、教育の力で〝集団〟にまで高めていきたい、それこそが幼稚園教育の中心的ねらいではないだろうか、というのが私たちの提案の趣旨なのです。

私たちは、この提案の裏づけとして、具体的な案を示しました。それは、年間の単元系列を主体にしたカリキュラムです。

私たちは、幼稚園過程においても、生活暦に合せた小さな題材による学習のまとまりを考えるばかりでなく、やや大型のねらいをはっきりもった、単元をおくべきだと考えています。年間六つおいたのですが、それくらいはいいのではないかと考えているのです。

もちろんこの提案主題である、社会集団の意識と行動のもりあげに対する学級での教育は、単元のみでは不可能です。全ての場において、また小型の単元（私たちは題材とよんでいます）で十分考えていくのですが、およそ、この単元を配置した頃がその発達程度を示す基準になるように、またその単元自体がそれをねらうように考えました。

つぎに、単元について解説を試みましょう。

1、ままごと（六月）まだ群的性格を多分に持っていますが、全級的にしかも意識して一つの遊びを持てるようにする。と同時に部分的ではあるが、何人かの共同遊びをさせようとしています。

2、魚つり遊び（九月）各個人が作った魚を持ちよって共同の場で、共同で遊ぶところにまで持っていって、学級がつながりを持つ集団であるという意識を、しごとを通して深めようというのです。

3、動物遊び（十月）グループによる共同製作を動物園にみにいくという目的活動と連関して行い、さらにその共同作品を全体的視野に立ってみうるようにしています。そして、ここでは、グループの深い結びつきの意味とグループ同志のつながりにはっきりと目ざめさせ、学級の集団意識をもりあげようというのです。

4、お店やさん（十一月）

5、郵便あそび（一月）

6、乗り物あそび(二月)この一連のものは、幼稚園における社会観察の主流をなすものとして考えた上に、集団意識や行動の点からみますと、知識的には内容自体の持つ社会的なものの認識が高まり、子ども同志の社会性という点からは、集団的結びつき、すなわち、個々の個人が友人と結びつくことによって、その個々の個人の生活が高まっていくこと、また集団による結びつきによってこそより高い程度の学習のできることなど集団の意識の向上を作業を通して、わからせようとしているのです。このあたりで、幼稚園段階においての社会性のしあげをしていこうとしているわけです。

このように、私たちは、年間の教育計画の中でこの問題を考えてまいりましたのでこれも提案の裏づけとして発表しました。

なお、具体的な研究として、その集団意識に高めるための具体的場であるグループのことにもふれました。

そして、それは、グループ内での子どもの意識の動きを、こまかく透徹した目で見通していくことが大切であることを申しあげたのでした。

四、話しあわされたこと

（分科会司会者　小山田幾子
パネル討議出席者　山村きよ）

最近まれにみる、といった熱心な討議が行われました。社会集団の意識や行動というような打ち出し方は、むずかしいではないかということからはじまって、グループの見方の問題に中心がおかれ？　お互いの体験談を中心に具体的に論議されました。

そして結論としては、この問題は、どうしてもねづよく、具体的な場で実践していかなければならないということが確認されました。

また単元の設定については、異論もありましたが、幼稚園段階でも、どうしてもこうしたカリキュラムをおいて考えないと、しっかりした教育になっていかないだろう、その日、その日を無事におえればよいといったことでは、いけないのではないかという話になりました。

五、あとで考えたこと

少し理くつっぽい研究会にはなりましたが、私たちが、幼稚園教育で考えなければならないことは、もっと背骨になることに関心を持ち、筋の通った研究を重ねていきたいということでした。理論のある実践活動こそ本ものの教育を築いていくからだと思います。（筆者は現済美幼稚園長）

〈南山幼稚園〉

放送教育

（三二・二・一二）

小山田幾子

子どもたちが、幼稚園という集団生活の場で、みんなで、静かに、たのしい音楽や、お話や劇などを見たり、聞いたりする態度をやしない、人間としての基礎が培われるといわれるこの時代に、いろいろの角度から種々の生活経験をさせ、情緒を豊かにすることは、非常に大切なことであり、その必要は、いまさらいうまでもないこと

だと思います。

放送教育は、その一つといえましょう。聴覚を働かせて、耳から注入するだけのラジオから、聴視覚に訴えて新しくテレビが登場してまいりました。テレビは、直接具体的でありますので、内容が教育的であって幼児向のものについては、幼児に適した教材といえます。

当園の放送施設について

保育家は三室ですが、小学校併設のために全校式校内放送の施設が各室にあります。ずっと以前この施設を使って、聴取していましたが、とにかく位置が高く、音響が悪く、声が散って聞きとりにくく、何としても、幼児を集中させて聞かせることは、不可能なことでした。その結果、その装置を取りはずしてコードを長くし、自由に動かすことができるようにしたのですがやはり器機が、よくなかったためか、声が割れてしまって、よく聞くことができないのです。その中、小学校低学年の時間と、幼児の時間とが、ぶつかってしまい、小学校が重点のため、自然に幼児の時間が聞かれない状態になってしまったわけです。そのため、当園では、区の備品費、あるいは修了の記念品で、各室に家庭用受信機を設備しました。

二つの室の受信機には、プレヤーをつけてレコードもかけられるようにし、一室は電蓄にしました。

そして高さも、子どもが腰かけて、大体頭の少し上にくる程度にし、プレヤーのついた受信機の台には車をつけて、自由に移動できるようにして聞かせています。

放送時刻について

朝の八時四十五分から九時までの歌のおばさんは、ちょうど登園する子どもたちを迎えるように各室から流れ、みんなの知っている歌や、たのしい音楽が、子どもたちをたのしませてくれています。

この時間に、こうしたたのしいリズムが流されていることは、本当にうれしいことと思います。

幼児の時間が以前十一時五分から十五分まで、十分間流されていたときは、当園では非常に利用しやすく、好都合であったのです。

それは十一時頃まで、主題による保育をしていたり、あるいは自由に遊んでいたりして、室にはいって、静かにしていると、幼児の時間になり、それを聞いてから、静かに食事の支度がはじまり、落ちついて食事をするということで、本当によかったのです。

それが十時五分からになってからは、冬期の場合は、仕事の途中の場合があったりしてみんなで静かに聞くというときが割合に少なく、集団で聞かない場合は、大体自由に聞くようになりがちなのです。自由にといっても、教師が全然ふれずに子どもにまかせておけば、次第に聞かなくなってしまうのです。

教師は適当に関心をもちながら、強制的でなく自由に聞ける態勢がとれるようにしています。

テレビの場合は月、火とも十一時三十分から二十分間ですので、終ってから食事の支度、そして食事をするようにしています。少し時間はおくれますが、食事前静かにできて、よい時間と思います。

指導について

当園では、幼児向のラジオ・テレビの内容をあらかじめ、テスキトによって知り、それと同時にカリキュラムの主題に合致したもののある場合は、週案立案のときに、

積極的にそれを取りいれるようにしています。

「お話出てこい」のようなものについては、その時期のカリキュラムに合うものが少ないのですが、幼児の時代にぜひ聞かせたい、昔話や、名作物を幼稚園ではなかなかできない音楽や擬音をいれ、その上語り手もお話の専門家であり、子どもも非常によろこんで聞きますので大いにこれを取りいれています。

事前指導、聴取中の指導、聴取後の指導など考えられますが、これらは適当にしております。それは決してゆきあたりばったりではなく、テキストによって内容が検討されていますので、そのねらいによって、そのときの子どもを考えて指導するようにしています。

聴取前指導については、題名をいうくらいで「今日はどんなでしょうね」くらいの程度で、たのしさを持たせるようにし、聴取中の指導については、聴取している子どもが理解できなかったであろうと思われるときに、説明する程度にしています。

聴取後についても、くり返させたり、どこがおもしろかったかなど聞いたり、お説教的なダメ押しは、なるべく避けて、聴取したままで、終る場合が多くあります。

よくいわれることですが、たのしく、いい気分で終ったところを、こわすような結果は、かえって悪いのではないかと思うのです。

テレビに対する子どもたちの興味と関心は大変なものです。

その原因は何か？　おとなたちのたのしんでいるテレビをみて子どももテレビはたのしいものと思っているのか、映画のように感じているのか、テレビの器械そのものに関心があって、あの小さなスクリーンに映されることに興味があるのかどうか、とにかく「テレビの時間よ」というと、テレビの室にいくために、上手に一列にならんで待ちます。そしてロ々に、テレビのおばさんのテーマ・ソングをうたって、うきうきしています。

〃先生今日はなあに〃

〃月曜日だからみんないっしょによね〃

〃テレビのおばさんだね〃

〃あしたは人形劇だね〃

テレビの室にはいって、静かにしながら待つ間に題名だけをいったりします。タイトルがでてくると「あっはじまり、はじまり」と、たいへんな、声、声、声です。

たくさんのバラが、出て来て、大小チューリップがゆれ、チューリップの中からテレビのおばさんの顔が現われ、テーマ・ソングがうたわれると、もうすっかりその中に、とけ込んでしまう子どもたちです。そしておばさんと直結して話し合いをしています。

テレビの内容については、いろいろありますが、とにかく、その効果は家庭調査の結果からも、子どもたちの遊びの中にも、いろいろの表現の中にも、現われて来ていることは見逃すことはできません。

テレビを保育に取りいれることは、新しがりやだからではありません。前にも申しましたように、幼児にはその時代に、幼児に適したいろいろの豊富な経験を得させることが好ましいと思うのです。

おとなはテレビに夢中になっている、さて子どもは？　子どもはみないようにということはできるでしょうか。子どもには子どもに適した、たのしいテレビをみせてたのしませ、保育の中に大いに文明の利器を利用して、明るいたのしい生活をさせたいと思います。

家庭へ帰ってから、家庭であるいは店先で見るテレビの影響、そして夜おそくまで

見ていることによって、疲れる子どもたちについては、これはおとながみるものだから、子どもは寝ましょうと、目を塞ぎ、耳を塞ぐことはできないと思うのです。

この点については、両親教育の指導が必要になってきます。

放送を利用して保育の効果をあげるのには、放送に対する教師の意識が問題となると思うのです。

何事もそうであるように、教師の意識のあるなしによって、子どもは、どんなにでも左右されます。放送に興味をもつようになるのもしかりです。

その教師が、意識をもつ、もたないについては、もちろんその教師自身の考え方、あるいは熱意、意欲、研究心その他に、よることですが、いくら熱意、意欲があり、研究心があってもその裏づけとなる費用がなければ、施設をすることもできず、結局したくてもできないという結果になってしまうと思います。が教師に熱意と意欲があれば、その施設は必ずやできるのではないでしょうか。

なぜなら、その熱意、意欲が周囲の人たちを動かすことができると思うのです。

ですが、その周囲の人たちが教育に関心をもち、教育に対して積極的に、いろいろの面で協力を惜しまない人たちならば、問題はないのですが、無関心な人でも、その教師の真の熱意や意欲を感じとって動くようになるものです。

逆に、そういう人たちを動かすような熱意がほしいと思います。

われわれ教師は、伸びる子どもたちのために、何事にも打ちこんで、研究し、反省しながら一歩一歩をふみしめて、山の頂きを目指して進んでいきたいと思います。

〈南千住第二幼稚園〉

自然の環境設定

（三二・三・七）

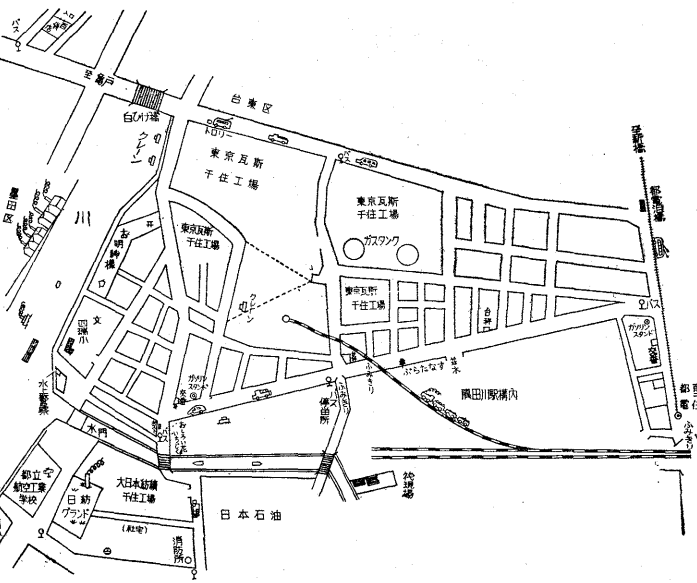
上野初枝

1. 地域の実状を知る

幼児は身近かの事物を直接見たり、聞いたり、さわったり、たたいたり、匂いをかいだりして観察する。それでその環境により見るもの聞くものが変って来るわけである。子どものうちに、なるべく豊富に何でも経験させることは、大変望ましいことであるが、この地域では、なかなか充分な経験を与えることは困難である。それは当園の通園地域が、一方は隅田川に、一方は隅田川駅という大きな荷物駅に、またもう一方は乗り物のはげしい区境の大通りにと、こうした三辺にかこまれた特殊な地域であるからである。

そこで、このような地域にある当園としては、どのように環境を整え、どのようなことに関心や興味を持たせていくか、ということが、まず第一の課題である。

第一に自然に関し、当園の地域の実情をよく調べてみて、何があるか、何が不足か、ということを分りたいと考えたのである。そこで手始めに、自分たちの最も手近なところから、ありのままの姿を記録して



めていくと、こんなところに、こんな木が、これは何という草かしらと、私たちですら疑問を持つものがたくさんある。先生のこうした態度はひいては、子どもにも大変よい影響を与える。こうして作られた自然地図によって、一目して園内の自然の状態をしることができる。

(2) 地域の自然地図作成(上図参照)

この図は園から子どもが歩いていける程度のところおよび子どもの通園区域の自然地図である。何月頃どこまでいけば、虫が取れる。乗り物を見るのはどこがよいか、あるいは見学するところが一目で分り、この方面の指導の資料として大いに役立つ。

以上二つの地図で園の内外の状態が一目で分ることになる。また作成後も一つ一つ新しい事実を発見したときは、その都度書き入れていくと次第にくわしい自然地図ができていくわけである

いくことにした。

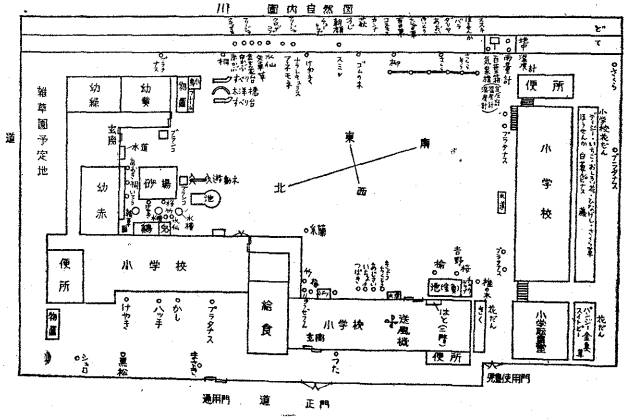
(1) 園内(校内)の自然地図の作成(下の図参照)

園の中にある一本の木でも草でも書き止

(3) 家庭環境調査

それではこの園に通って来る子どもの家庭環境はどんな状態であろう。

家庭の状況の特色は、職業の点では運転手・人夫・工員の肉体労働者が四〇%をしめている。学歴では父母とも中卒、高小卒が六〇%をしめていること、住宅の畳数で



も五〇%の者が六畳、四・五畳の二間以下に多人数で住んでいる。自然の環境のことは次の章で取りあげるが、ないものだけをかくと、

お宅では室または家の中にお花をかざりますか。　いつも飾る四三%　ときどき五三%　ない四%

お家で何か動物を飼っていますか。

います五四%　飼ったことがある三九%　ない七%

お子さんを海や山、川に連れていったことがありますか。ある九三%　ない七%

2. 自然に対する本園の実態

（1）恵まれている点

前の自然地図や家庭調査から園として恵まれている点をさがしてみると、第一に名に負う隅田川がすぐ横を流れ、舟のいろいろ、珍らしいものでは筏も見られる。潮の干満、水門、大きな橋も見られる。石炭、煙突ならばどこを向いても見られ、その他機械類ではガスタンク、クレーン、トン秤など珍らしいものもあり、貨車、機関車、トラック、石油車、オート三輪、バスなどの乗り物が豊富に見られる。最近トロリーバスが区境を通ることになったので、種類が一つふえたわけである。また少し遠いが航空学校までいけば飛行機の模型もある。

家庭ではトラック、オート三輪、自動車スクターを持っている家が二一%、自転車のある家が七四%である。土地柄石炭業、運送業が多いので道路に車の姿が見えないときはない。

日紡グランドは唯一の草原で虫取り、つみ草に大切なところである。また上野動物園への交通の便がよいので百%の子どもがこれを見にいっている。

（2）恵まれない点

恵まれない点といえば、町に花屋が一軒もなく、並木や学校の木は美しい黄色、赤色になって落葉せず、みどりの葉からすぐ茶色になって落ちる。空気が悪いのがその原因ではないかと思われる。ガス会社のそばの家庭は、ガスくさい中で生活し、洗濯物もほこりで乾かないうちによごれてしまう状態である。

家庭でも庭のある家は、三九%しかなく、その庭も家業でものを置くなどというのも含まれている。植えてある木や草も数が少なく、美しい花が咲いたり、実がなったりするようなものは、殆んどない。また子どもの遊び場がないので、交通のはげしい道路や、たまには危険な駅構内にはいって、遊んでいるような状況である。

子どものあそび道具でみると、動くおもちゃ、六五%、楽器七四%、虫眼鏡、計り、磁石などある家は七四%、それで遊ぶ者四二%、で科学的なものを使ってあそぶ度が低いのではないかと思われる。

つまり植物や季節のうつりかわりを知るということが、恵まれないものの大部分である。

今までの園の子どもの様子はというと、美しい花が咲いた。「きれいだなあ」と見る前に、あっ、という間につみ取ってしまう。珍らしく「とんぼ」が花に止まった。そっと見ましょうと、よっていくと、やにわにつかまえ、次の瞬間にばらばらにしてしまう。美しい切り花を飾ってもあまり関心もない。たまに関心を示すと「先生この花いくら？」という状態であった。

3. 自然に対する環境設定

これで本園の実情が分ったわけである。恵まれている点は、これを大いにいかし、またかけているものはできるだけ園で経験させたいと考えたのである。子どもたちが地域的に片よった経験に終らないよう、恵

まれている点、かけている点をどのように取り上げていくかを苦心した。これはカリキュラムの面で大いにいかしてあるつもりである。

このようにカリキュラムを組み、必要なものを書き出し、当園職員および小学校職員父兄の協力のもとに、一つ一つ形づけて作成した。これは金銭と関係の深いものだけでに、そうなんでも簡単にはいかないものもある。作ったものの順序は前後するが庭の方と屋内に分けて記すことにする。フレーム・砂場のような、どの園でもあるものはぬきにして、当園のとくに苦心した点や、変っている点などの特色あるものを上げていくことにする。

（1）園庭

○花壇　川岸の土手には小学校の各学年が場所を区切り草花を植えているので、幼稚園も場所を分けていただいた。ところが土手が高く狭いので多くの子どもが手伝うというわけにはいかないので、きくのような下から見られるものを植え、土手の下、柵いっぱいに低くこしらえた。子どもたちに土や腐植土を運ばせ、土をほぐす、種子まき、毎日の水かけ、霜除けの藁をかぶせるなどの手伝いをさせている。

また学校の花壇が広く、草木の種類もたくさんあるので、いつも見せていただく。こんなところは併設幼稚園の大変よい点である。庭に前からある草花は石で囲んで存在を明らかにし、子どもたちが毎日花壇やフレームに水をやるとき、いっしょにやるようにしている。去年は花も葉も折られてしまったが、今年は始めの一輪（水仙）だけが折られただけで、あとは美しい花が咲くと、子どもたちは匂いをかいだり、ながめたりしてよろこんでいる。

○小雑草園　砂場の横の丸いセメント管はもとは防火用水池だったのであるが、一つは雑草園にし、園長先生からいろいろの草をたくさんいただき植えたり、また遠足にいったとき、根ごと取って来て植えたりした。子どもたちはきれいな花を見つけると根ごと取る者が多くて困った。最近はその草も枯れたので、小さなかわいらしい花を植えてある。

○金魚池　遊動円木のそばの池はもとは、丸い部分だけであったが、小鳥小舎をどかして大きくし、金魚やめだかを入れ、大勢で四方から見られるようにした。水のないときはうさぎといっしょにはいって遊んだり、夏の水あそびのときはプールにして遊ぶ。

○小鳥・兎・鶏　毎日の飼育は、たいへんなものでその点小学校の飼育係の児童がよく手伝ってくれるので、この点も大いに助かっている。

○川を見る土手　大切な、そして恵まれた教材である川を今まで幼稚園から見せずにいたが、二学期に学校の隅の、神社よりのところに土手を造り、自由あそびのときは自由に見にいき、あきずに舟に見とれたり、かぞえたり、大小比べたり、舟が作る波をよろこんだり、また川の水の多いすくないなどに気づいたり、舟の人に手をふったり、はては呼びかけたりしてたのしんでいる。また向側の工場のたくさんの煙突の煙で風の方向を知ったり、土手のおかげでいろいろのことが観察されるようになった。

その他学校の池・風速計・雨量計・気象旗など子どもの目にふれるものは、その都度使わせていただいている。

（2）屋内

○観察台　窓ぎわの観察台も小学校のままで窓いっぱいに高く、川に面した部屋ではそこに乗って、川を見て困り、研究の始まる前は、川を見せまい見せまいとしたものであった。今度この観察台の巾を広くし、低

く下げて水栽・水槽・小鳥・植木鉢などをならべて観察させるようにした。

観察台の下は棚にして、子どもたちの製作物や材料をしまうようにした。

○小鳥 十月始めに三種類の小鳥を、一つがいずついれ、各組においた。これも初めは子どもたちが「鳥のヤロー」とかごを四方からたたいて、カナリヤなど尾を何本もぬいたりしたが、今ではきそって水を取りかえたり、餌の世話をしていたわるようになった。小鳥も部屋の空気になれ保育中にも美しい声でさえずり、思わず子どもも先生も声をひそめて、聞きほれていることもある。

○切り花 季節の花も、同じ種類のものでなく、置場も子どもたちと相談してきめている。水の取りかえや自分たちの組に配られた花をすきなようにいけたりしてたのしんでいる。

○水槽 金魚・亀・でんでん虫・えびがに・おたまじゃくし・秋の虫など飼ってみた。金魚は年中生きていて冬の間静かにしている様子がよく観察できた。金魚・亀・秋の虫を飼ってそれぞれ餌の違うことも経験することができた。

○動く玩具 子どもの大すきな玩具の一つに動く科学的なものがある。家庭では六五%のものが持っているが、大部分はゼンマイ・はずみ車のものである。そこで幼稚園では、ゼンマイ、はずみ車をはじめばね・電池利用のものを揃え遊ばせている。都合により数が少ないので保育上困るときもある。またこわれた科学的玩具も家庭から持ちよって置くと子どもたちは玩具の中の構造を見たり、いじったりして遊んでいる。

○その他 ままごと道具、人形などは教師が設計して作らせたり、母親に作ってもらったりした。

こまかい機具・道具はカリキュラムを見て、単元ごとに何が必要か、不足か、というように記していき、園で買うもの、家庭から持ち寄って間に合うもの、とに検討して材料をそろえていった。また自然物を使って遊ぶことは、誠に不自由で、たとえば落ち葉でも学校に落ちたのを拾って押し葉にし、先生方が自分の家の方からたくさん持ちより、子どもたちのと交ぜてあそばせるとか、遠足にいったとき、松ぼっくりを拾って来て工夫して遊ぶ、中味を食べた貝であそぶなど苦心している。

金銭的にもあまり恵まれないので、子どもたちに工夫させる意味で、各家庭の協力で空箱・空びん・包み紙・ひも・布きれなどあらゆる廃品を集めて、それで思うように作らせてみた。

4. 今後の課題

まだまだいたらぬ点が多々あるが、今後やりたいことは、小鳥小舎の中に木を植えて、なるべく自然の姿で見せたい。スライドやフィルムの映写が、保育室で簡単にできるようにしたいなどいろいろあるが、一番やりたいことは、子どもたちが自由にはいって遊べる雑草園を造ることである。今園舎の北側に少し土地があるので、せめて夏の間だけでも何か青い草があれば、と思っているが、高い代金を払って土を買って来ないと、雑草も生えない土地柄なので、これも大変である。庭にあるセメント管（水槽）の二つに金網のふたができた。今年はおたまじゃくしをいれたり、かえるやかめの冬眠など観察させたいと思っている。

今年はこのようにたくさんのものを作ったが、今後はこれを十分に活用して、子どもたちに「自然」に関する豊かな経験をもたせるよう研究したい。

なお、以上の施設、設備につき改良したり、新設していきたいと考えている。

東京の幼稚園展

（三二・二・八～一三）

友松 あきみち

展覧会には少なくも事前に一年の準備が必要であろうが、教育関係の場合はそれでも期間が短いようだ。とくにデパートなどを会場にして一般人を対象に行なうためにはよほど慎重に計画が練られ、その線にそって綿密に資料の蒐集が行なわれておらぬとすぐに底が割れてしまう。平易に見せるということは必ずしも質を下げることを意味しない。かえって専門家を対象とするより素材に工夫もいるし、楽しい雰囲気を場内にかもし出すためには展示内容が充分に消化されておらねばならぬ。先ごろ銀座松屋で開かれた「たのしい幼稚園展」は各種催し物の多い東京でも近年出色のものといわれているが、そんな世評をかち得ただけに主催者側の苦労も多かった。

この展覧会は東京都私立幼稚園協会の結成二十年に当り、わが国幼稚園創設八十周年の記念と併わせて企画されたもので、幼稚園教育の正しい在り方をひろく都内家庭層に認識して貰うことが第一の目的であった。一種のPR運動であるが、その意味で必ずしも対象は一般人のみとは限っていない、望ましい園の管理と保育内容についてわれわれの側においてもだいぶ耳の痛い展示があったはずである。私どものところでも、会を参観した父兄から園に欠ける諸点を指摘されて赤面した一人である。開会前は「入園志望の減少した私立幼稚園の宣伝」ぐらいに推測していた報導関係も、会期の経つにしたがい、快よく協力を申し出られたのも、今回の展覧会の内容をよく物語ってくれている。予期以上に多数の入場者をみたことは、私立の緊密な組織が動員の基礎をなしてはいるが、要は社会の関心に応えうる回答をこの展覧会がまがりなりにも備えていたことだと思う。

会場は長方形の百四十坪ほどのものであったが、ほぼ全景が一つの幼稚園として設定された。理想的な三十坪の保育室を中央に建て、その前後に前庭と運動場が用意され、それぞれの空間壁面に資料や写真、園児の作品が展示されている。この思いきった企画が、来会者を何らの説明なしに、場内の雰囲気にひき入れる大きな誘因となった。運動場の砂場や遊具を自由に使用して貰い、保育室の内でも器物に触れることを厭わず、とくに子どもたちには教材を提供して気持のおもむくままに遊べる機会をつくったことも、会場を終始なごやかなものにしてくれていた。

この種の展覧会はとかく説明書きが多くて、懇切な図式がやたらと目につくものであるが、入場者の平均を中学二年（昔の高小卒）を修めたところに置いて、できるだけ写真や絵、実物を以てこれに代え、読むことより見る陳列方法の中に一貫して次の内容をもることにつとめた。

一、幼稚園の歴史と現状。一、教育の内容。一、幼児の発達と幼稚園の役割。一

小学校と家庭との連絡。

他に幼稚園生活に取材した写真公募展と園児の作品展（絵画）が準備されていたが、これらが混然と一体となるところにこの会場の一応の陳列目標があるわけであった。それらがどのように処理されていたか、次に大要を経路にしたがって述べる。

入口付近

○ばらのアーチをはいると、幼稚園の父フレーベルについて業績が紹介され、わが国幼稚園の歴史にも触れている。

○幼稚園の教育について教育要領の五目標をあげて、明治期の私立園の写真その他貴重な参考資料、書籍を展示した。

○学校体系における幼稚園の位置を絵で示し、三歳児からの入園について説かれている。

前庭

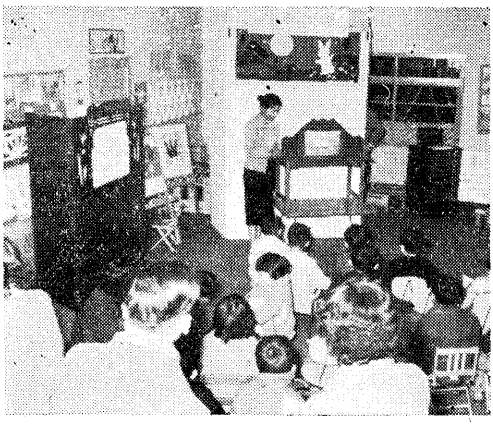
○園舎の前に花壇をつくり、飼育小屋、滑り台、キャッスルジム、布製プール、園舎の小模型を置く。遊具には発達の段階によって幼児の使用できる程度、ならびに運動機能の助長に役立てる面を説明してある。

○壁面には都内幼稚園の分布図（国公私立）と八十年間の発展史を図版に描いた。

○実物と等尺の足洗場と水飲みをつくり、砂場を付した壁面を幼児の共同製作になる運動場の絵で色どり、望ましい運動場の平面図を三点掲示している。他に、大正、昭和初期、戦時下の私立園生活の写真を展示。

保育室

○室内を中間色で配色。棚、個人用引き出し、黒板、掲示板、畳、ピアノ、放送装置などを設備して教材遊具が適当に置かれている。机や椅子は新しい形式の鉄製。これらのものを自由に使用して絵なども描けるように教材を用意した。



○室の壁その他を幼児の製作品で装飾。通路には大積木、スライドボード。ここでは毎日交替で、教員養成所の生徒による人形劇などの催しが行われていた。

○保育室から運動場を望む形で一方の壁面には上部をルーバーで飾り、園児の生活を記録した写真と絵によって幼稚園の一日を語っている。

①起床から登園まで……自分で着衣。幼児向の手洗い便所の設備。登園の服装。交通信号の見わけ方。

②登園してから……挨拶。靴のはきかえ、鞄などの始末。正しい習慣をつくるための保育。

③保育のねらい……でき上りより、喜んで描いたり、作ったりすることの大切さを、二種の絵によって比較。各種の遊び、健康診断等の写真。

④おべんとう……偏食を直すため努力している母親の例を示し、内容の良否を各種の実物展示でしらせている。

⑤遊びの中で……けんか、順番、告げ口について幼稚園での指導の実際を、三コマの続き絵に描いた。

⑥子どもたちが帰ってから……掃除、器具の点検。明日への準備として打合会、

記録、家庭訪問、教材の買物、研究会。他に月案や週案、日案の一部を掲げた。

運動場

○他の催物場からの入口に噴水を設け、ジオラマ型式で年中行事の写真と絵。通路にはグローブジャングル、太鼓橋、巧技台を置いて自由な使用にまかせていることは前庭と同じ。

○壁面には三歳から五歳までの幼児の発達を示して、数、言葉、生活習慣、画、遊び、運動機能についての絵による説明を行ない、棚を出して年齢にふさわしい玩具の陳列をする。

○幼稚園では一人ひとりをどのように導いているか、乱暴な子、泣き虫の子、友だち遊びのできない子、落ち着きのない子、偏食の子について、家庭における原因を絵で示して、その指導例をあげている。

○家庭と小学校が幼稚園に希望している事柄の相違を絵と写真で示し、図では「子どもらしい」「自分の意志の発表できる」「健康な」子どもをつくろうとしていると結論、両親の教育に対する理解と協力を求めた。

○写真展、作品展は以上の流れにそって適当に壁面、柱を使用して展示。

教員室（兼保健室）

○一室をそれに当て、入口に身長・体重を簡単に計れるよう図版と計器を用意した。身長は年齢別に男女幼児の等身図を貼ったが、昭和三十年度の都内幼稚園児の標準を使用している。ここでは発育のおくれた幼児の父兄に対して親切な指導が必要であった。

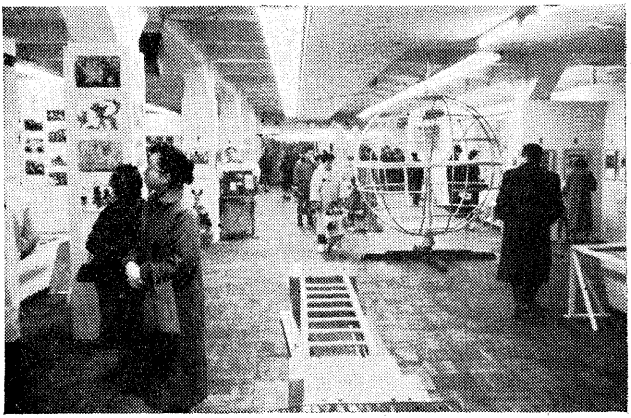
○室内では毎日午後教育相談を受ける。相談の内容でとくにめだったことは、三年保育に関する質問の多かったことである。

○他に控室からは、テープに吹きこんだ幼児の歌や生活の記録を会場に流しており、定時には松屋全館に放送された。

以上、かいつまんで展覧会の模様について述べたが、欠けていたものはやはり準備の不足ということである。理想の保育室とはいっても、新しく考えられた器具、あるいは望ましい設備について何ほどの示唆も与えることはできなかった。一年なり二年にわたって園生活の中で変っていく幼児の生長する過程を写真なり作品にとらえておくことができたら、訴える力はさらに強かったはずである。

だが、僅かの日数ではあったが一千枚に近い撮影を行なった写真にしても、実際に使用できたものは至って少数であった。この種の展示に要する費用の際限ないことを示す一例であるが、限られた日時と資金の中でこれだけの展覧会の行なえたことに今は満足すべきであるのかも知れない。計画されてからほぼ一年、顧みて多数の関係者の協力なくしては到底でき得なかったことを痛感する。

（筆者は神田寺幼稚園長）



幼稚園の自然観察環境について

——自然観察モデル幼稚園の構想——

頌栄短期大学　松村義敏

一、自然観察モデル幼稚園

私はかつて「全国の植物園に幼稚園を併設せよ」[1]という突飛な意見を発表したことがある。これはある立場からは実に無暴な叫びであったと思うが、これを裏返していえば幼稚園の環境が植物園のようであってほしいということに外ならない。

私はまた「幼稚園の緑化」[2]という題で愚見を述べたことがあったが、これも全く同じ意園の下に幼稚園の環境を、積極的に、人為的に改良し、育成していく一つの具体的方策を述べたに外ならない。

それはあたかもフレーベルが、自分の教育所にいかなる名を与えんかと思いつづけていたときに、その名を幼稚園とつけたときの感覚を思うと当然この自然環境の育成をおろそかにしてはならないと思う。

(1)植物趣味第十二巻第十二号(一九五〇)

(2)保育第五巻第三号(一九五〇)

すなわち彼は、スタイゲル山の上から、ブランケルブルグの勝景をながめ、その美にふれ「見つかった、その名はキンダーガルテン」[3]と叫んだそうであるが、園児は正に自然の花園における植物にたとえられ、美しい環境であるためには、人の心の美に加えるに自然の美をもってせねばならないことはいまさらもうすまでもない。

しかるに今日は都会の幼稚園はもちろん田舎の幼稚園においてさえ、建物とわずかばかりの屋外遊具が備わっているような現状である。

いうまでもなく、決してこれで満足しているわけではなく、経費の問題がからんでいることは分るが、費用を使わぬでも、環境を自然に近づけていくことはできるから今少しその方面の努力をはらってほしいと思うものである。

(3)庄司雅子(一九四四)フレーベルの教育学一〇五頁

近頃多額の費用をかけて、各所に設けられているモデル幼稚園においてさえ、建物の近代的色彩は申し分はないが、私の見たところではその環境が、自然美と、自然観察の保育に事欠いているように思う。

そこで私はせめて日本に一つ位は、まず

立派な自然環境を選んでそこに理想的な建築を配して、いわゆる自然観察のモデル幼稚園を設定し、他の保育項目に比していわば立ちおくれたこの自然観察保育を指導していくものがあってもよいのではないかと思う。

二、自然環境の育成

自然観察環境を人為環境と自然環境とに分けることはこの論を進めていくのに必要である。前者は人工的な施設に相当し、後者は、一定の風致をもった自然そのもの、またはそれとほぼ等しい状態のものを指すのである。

幼児の生活において、自然の中でいろいろな経験を豊かにもたせることが、一般保育はもちろん、とくに自然観察保育の主要なねらいであるとすれば、人為環境がとともにのっていることは無論大切なことではあるが、自然または自然に近い環境が何としても、より一層大切であって、これが近代的保育の場とならなければならない。

このことは何ものにも勝って審美的感覚と自然科学的「芽生え」を伸ばすのに役立つものであって、これをいかにしてとり入れ、また育成していくかが今日課せられた問題であろう。

近頃ときどき大家の邸宅が開放されて、幼稚園をその中で経営しているという例が見られる。これはもともと人為的なものであり、しかも幼稚園として計画されたものでないから、理想的とはいえないし、また自由に活用するのに不便を感ずるではあろうけれども、多くの場合これは規模が相当大きくて、自然を充分に感じとれるので、やりようによっては自然観察保育の目的を充分に果すことができると思われるので、関係者はその特色ある環境を生かしていただきたいと思う。

しかしこのようなことはだれでもが望めるものではないし、またはじめから自然に恵まれたところに幼稚園を設けることは、これまた困難であるので、時間をかけ、手間をかけて、自然に近い環境に仕立てていくことが大切であろう。

それには心して種子を蒔き、リンゴ一つの種子もおろそかにすることのないようにして、これを育て、また植樹を心がけるべきである。

実際三十年の歴史をもった幼稚園で、その創立のときに植えた樹々が今では全く見ちがえるような大森林となって、自然化しあたかもはじめからあった自然のままの森のようになって、美しい自然環境を構成している例も少なくない。

幼稚園の植樹計画はどうしてもこういう教育目的に沿って行われなければならないのであるが、同時にそれが、経営上にも役立つように考えられれば一層よいことと思う。

すなわちまず幼稚園の建物の持久年限が五十年と見れば、その五十年後に改築の必

要が起って来るので、その改築用材を、全部とはいかなくとも、少なくとも半分位は補給できるように考えて、植樹の樹種を選ぶことである。

むろんそのためには、その土地の気候風土が適するか否かが問題になるけれども、それさえ適当であれば、スギやヒノキ、ケヤキ、センノキ、マツなどのいわゆる建築用材を主体として配植するとよいと思う。

私は独り幼稚園に限らず、いやしくも教育機関でその環境の殺風景なのは大きいマイナスであるから、この植樹が第一に環境の美観をととのえるに役立ち、第二にそれが自然観察の場となり、第三に右に述べた実用的な意味をもつものでありたいと思うのである。

三、自然環境に加えたいもの

こうして自然環境がととのって来ると、その中に、できるだけ自然に近い形で動物を配して、静的なものから動的なものにしていきたい。たとえばサルその他の小家畜舎はもちろん、もっと自然な姿のものとして、シカや七面鳥のようなものを放ち、また池を設けてガチョウ、アヒル、オシドリなどの水鳥を放ち、さらに水草の育成、水棲昆虫を住わせることが望ましいことと思う。

林木には各種の巣箱を小鳥のために設けることを忘れてはならないと思う。すなわち小鳥をせまい籠の中にとじこめることは自然環境のととのっていない場合にはやむを得ないことであるが、小鳥の観察は自然のままでやることが本当だと思う。このためには、庭の一角のよく観察できるところに、小鳥の食堂をつくってやることである。つまり餌をやる台すなわち四本脚または一本脚の小テーブルであって、この上に水の皿をおき毎朝パンクズや、米や小麦を撒いてやるので、こうすればいろいろの小鳥がにぎやかにおりて来て、人の気配をおそれることなく、仲よく餌をあさるようになって来る。

この方法によると季節に応じて異なった鳥を見ることができ、ときおり渡り鳥がその往き来に立ちよって、数日をここに滞在していくこともあり、小鳥を、彼らの自由活動において観察することができる。これはすでに米国あたりで各所に行われていることであり、私も試みて成功をおさめたことである。

次に森林の外に、野草の生いしげる区域をもつことである。むろん田圃をその周辺にもち、野草に不自由ないところではこのようなことは必要とはいえないが、要するに野草すなわち雑草の中には各種の昆虫やその他の下等動物が巣くらうことであるし雑草の観察と相まって、これらの動物の生態観察もできるし、また昆虫と植物との関係、たとえば食物や花粉の媒介などについて理解する機会が与えられる。

飼育箱で昆虫を飼うことも、小鳥を籠で

かうことと同様に、自然環境に乏しい場合の、やむを得ない方法であって、なるべく戸外で自由遊びの中に観察経験をつむようにしたいものである。

こうした草原（クサハラ）の他に人為的なものではあるが、花壇や、温室は大小にかかわらず、ぜひととのえたいものである。とくに都会地では、花壇は非常に効果的なものと思う。

四、自然観察環境の理想目標

ここで私が考えて見た自然観察環境として望ましい施設目標を示すことにする。もとより、幼稚園の現実からするとほど遠いものであるかも知れないが、理想は高いところにおいて、漸次不足を充しつつ、これに近づくよう努力を払っていただかねばならぬと思う。これらについての詳細は次回にゆずりただ項目のみを示すことにする。

（つづく）

1. 屋外環境

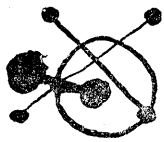
1 樹蔭（森林樹木）
2 小動物舎
3 花壇
4 池、小川
5 草原（野草）
6 菜園
7 芝生
8 砂場
9 徒渉プール
10 禽舎（小鳥の家）
11 鉢植棚
12 日蔭棚（藤、バラ、アケビ等蔓植物）
13 花園
14 巣箱
15 果樹園
16 フレーム
17 遊具
18 水槽（水族槽）
19 温室
20 アーチ
21 水田
22 生垣
23 築山
24 百葉箱
25 トンネル
26 バードテーブル
27 特技の教諭
28 誘蛾燈

2. 室内環境

1 自然観察室
2 鉢植
3 花瓶（活花）
4 水槽（水棲昆虫、魚類等）
5 飼育箱（昆虫、カゲ等爬虫類、小動物）
6 標本展示
7 出窓
8 環境画
9 水栽瓶
10 顕微鏡
11 望遠鏡
12 蟲眼鏡
13 映写設備
14 温度計等
15 図書
16 レコード（鳥の声など）
17 楽器

3. 園外利用物

1 公園
2 神社の森
3 自然の山
4 海岸
5 河原堤防
6 池沼畔
7 田畑
8 植物園
9 動物園
10 水族館
11 博物館
12 牧場
13 工場
14 プラネタリウム
15 停車場、車庫
16 名所（ボタン、ハギ、ツツジ、ヤマブキ、ウメ、サクラ等）
17 野原
18 店舗（デパート）
19 気象台（天文台）
20 映画館



幼児のボール遊びに関する研究⑥

――投捕を基礎としたボール遊び――

徳島大学学芸部体育研究室　岡本卓夫

前回にはホルディング（持つこと）を基礎としたものについて報告しましたが、今回は投捕を基礎とした遊びについて報告します。

この遊びは主として男子に好まれるものが多いが、女子の場合でも殆んどよろこんでします。幼児たちはボールを持つと大体一度は投げてみます。と同時に捕えようとします。とくに二人以上になるとその傾向が強いものです。それが上手にできないとしても、いっしょに遊ぶために相手に投げ、また投げ返すというプロセスをたどります。そのプロセスにおいて彼らは身体支配とか、インサイト（洞察力）を自然に獲得していきます。それでは、このボール遊びから獲得する彼らの経験内容にはどんなものがあるでしょうか。

(一)ボールが手からはなれるときの感覚を知るようになる。
(二)投げるときの脚と手のバランスを知るようになる。
(三)遠近の目標に向っての正確な投げ方を知るようになる。
(四)直線投げ、フライ投げの投げ方を知るようになる。
(五)捕球におけるタイミングと方法を知るようになる。
(六)ボールの硬軟、大小、質などによって、いろいろ投捕球の仕方が異なることを知るようになる。

以上がこの遊びにおける主なる経験内容になるでありましょう。つぎにその遊びの代表的なものについて数種紹介することにします。

(一)　的あて遊び

○人数　一人～六人（グループの時は五～六人とする）

○準備　幼児ボール（大）一、直径五〇糎のサークル一、紅白球一人に一個宛

○遊びの目標

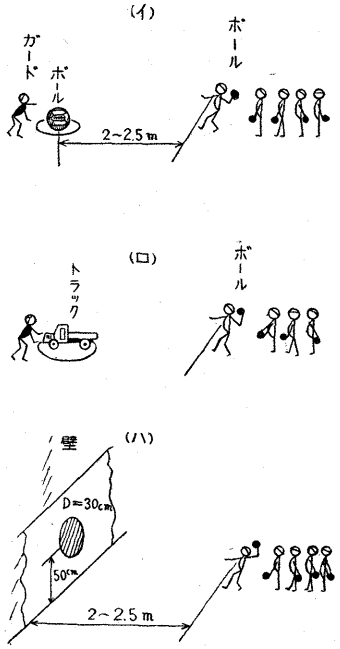
各プレイヤーは二～二・五米の距離から、サークル内に置かれたボールに、紅白球を投げ当てる遊び。

○ルール

1. 一人の時は自由に投げてよい。
2. グループでするときは、一グループから一人のガード（ボール置き）が出ること。
3. ガードになったプレイヤーは、サークルの近くに位置し、ボールが円外へ出たら入れることをする。
4. 各プレイヤーは二個以上投げてはいけない。
5. 線の内側から上手（うわて）投げで投げること。
6. ボールに当てた人（いかに当っても良い）は、その球を再び拾って、列外に位置する。
7. あたらなかったプレイヤーは、そのままで列外にいっしょに並ぶ。
8. 全員が終り、多く当てた組が勝ちとなる。

○留意点

1. 全員が終ったらみんなで、あてた人の数を読ませる（このとき球を高くあげさせていくこと）
2. グループ編成は三組くらいまでとし、人数の多いときは二回に分けてするのが良い。
3. 小さなゴムボールを使用しても良い。
4. 遊びを始める前に各プレイヤーに、一個宛ボールを持たせて置くこと。
5. ボールの数が少いときは、先頭のものだけに先に渡して置き、つぎつぎとリレーさせる。ただしこのとき、的にあてた人とあてなかった人の区別をはっきりすること。
6. この遊びでは投げるものが球製なら、的は玩具でもまた壁に円を書いても、どんな的でも良い。台をつくるのもおもしろい。
7. 投げる球は片手で握れるものを使用すること。



(二) 輪ぬき遊び

○人数　一人～六人（グループのときは五～六人とする）

○準備　直径五〇糎の輪一。各プレイヤーに紅白球（小さなゴムボール）一個宛

○遊びの目標

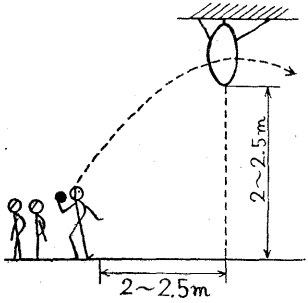
床、あるいは地上二〜二・五米の高さに吊られた輪の中を、規定の距離からボールを投げて、くぐらす遊び。

○ルール

1. 一人のときは自由に投げてよい。
2. グループで遊ぶときは、輪の真下より、二〜二・五米の距離から投げる。
3. 各プレイヤーは二個以上投げてはいけない。
4. 線の内側から上手(うわて)投げで投げること。
5. 輪の中をくぐらすことができたプレイヤーは、そのボールを持って、列外に位置する。
6. くぐらすことができなかったプレイヤーは、そのままで列外にいっしょに並ぶ。
7. 多くくぐらせた組が勝とする。

○留意点

1. 遊びが終ったら、くぐらせた人数をみんなで数えさせる。
2. グループは三組以内がよい。
3. ボールの数が少ないときは、交代でさせる。ただし、くぐらせた人と、くぐらせなかった人の区別をはっきりすること。
4. 輪はどんなものを利用してもよい。ただし揺れないように固定して置くこと。
5. 輪の両側にグループを置いて遊ばすのも良い方法である。



(三) 投げ込み遊び

○人数 一グループに八〜一〇人。

○準備 ネット一、紅白球二〇（紅一〇、白一〇）

○遊びの目標

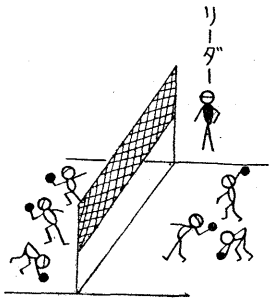
二つのグループは、ネットをはさみ紅、白、に分れ、球を持って場内に立つ。リーダーの合図で、互いに相手の球を投げかえしながら、味方の球を多く相手側に投げ込む遊び。

○ルール

1. 一度に二個以上投げることはできない。
2. 止めの合図があったら、ただちに止めねばならない。

○留意点

1. 時間は一分〜二分とし、何回にも分けてするのがよい。
2. ネットの高さは二米までとし、もしネットがなければ、低鉄棒を利用したり、縄を張ったり、何を利用しても良い。ただしこのとき、その真下に、線をはっきり引いて置くこと。
3. ボールのないときは、紙を丸めてやってもよい。
4. 「止メ」の後で、各グループに数を数えさせること。
5. 色分けして数えなくても、全体の数でもよい。
6. 両グループ陣の広さの条件を考慮すること。



(四) 紅白球入れ

○人数 一グループ一〇名

○準備 一グループに紅白球三〇個。籠および棒一組

○遊びの目標

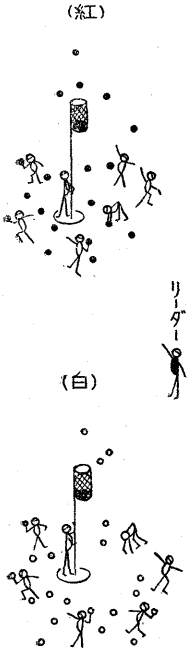
約十米はなれて、紅、白両グループは、籠を中心にしてボールを持って立つ。リーダーの合図により、互いに味方の籠の中へ多くの球を投げ入れっこする遊び。

○ルール

1. 相手のボールがはいっていても得点数にはならない。
2. 一度に何回でも投げ入れることができる。
3. 投げる方は自由である。
4. 一定時間で多く入れた組が勝ちとなる。

○留意点

1. 時間は一分〜二分くらいで何回にもするとよい。ただしリーダーはボールの入り具合をよく観察していて少しくらいの時間のずれはよい。
2. 籠の高さは二米とする。
3. 終るたびに、みんなで数を数えさせる。
4. プレイヤーの中から籠持ちを交代に出させること。



(五) リング・トス

○人数 一グループに五人〜六人

○準備 一グループに直径五〇糎のサークル一つ、各人に紅白球あるいはビーンバグ（豆袋）二個宛。および籠一つ。

○遊びの目標

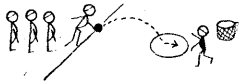
グループはサークルより二〜二・五米の位置に各人球を二個宛持って縦に一列に並び、サークルの中に順次球を投げ入れる遊び。

○ルール

1. プレイヤーは線の内側より下手（したて）投げで投げ入れること。
2. サークルに少しでもかかっていれば、成功とみなす。
3. ガードになったものは、成功した球だけを、横にある籠の中に入れる。
4. 二個投げ終ったプレイヤーは、列外に位置する。
5. 多く得点した組を勝ちとする。

○留意点

1. 紅白球を使用するときは、サークルを直径一米くらいとし、ビーンバグのときは、五〇糎くらいでよい。
2. 必ずしも籠に入れさせなくても、成功した球をそのプレイヤーに持たせて置くのも良い。ただしこのときはガード不要。
3. 終ったら、みんなで数を数えさせること。



(六) ティーチャーボール

○人数 六人〜八人を一グループ

○準備 一グループに幼児用ボール（大）一つ。

○遊びの目標

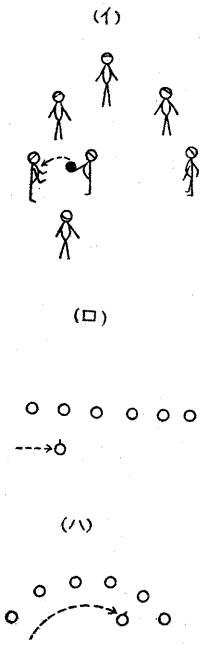
グループは手をつないで大きな円をつくり、その中の一人が出てボールを持ち、各プレイヤーの前を通過しつつ、ボールを投捕していく遊び。

○ルール

1. 下手（したて）投げで投げ、落さないように捕えること。
2. 一回通り終ったら、左（右）のプレイヤーにボールを渡し、自分の位置にかえる。
3. 次のプレイヤーも同様式で投捕していく。
4. 競走のときは、一回通り早く終った組が勝ちとする。

○留意点

1. 最初は手渡しから初め、次第に間隔をとるようにする。
2. サークル中にはいってやらなくても、そのままの形でも遊べる。
3. いろいろのボールを使用してみる。
4. 横隊とか、扇形などいろいろの隊形ができる。



(七) 名指しボール

○人数 五人〜六人を一グループ。

○準備 一グループにボール一個。

○遊びの目標

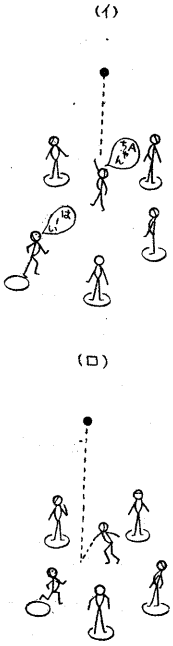
プレイヤーは、手をつないで大きな円をつくり、その真中にリーダーによって選ばれた一人のプレイヤーが、ボールを持って立つ。「始メ」の合図で、ボールを上に投げ上げると同時に円周上の誰かの名を呼び自分の位置にかえる。そのとき名指しされたプレイヤーは走り出て、そのボールを捕えるという遊び。

○ルール

1. 捕球のときは何回はずませて捕えてもよい。
2. 名指しされたプレイヤーが、つぎのセンタープレイヤーになる。
3. センタープレイヤーは、下手(したて)投げでできるだけ高く真上に投げること。

○留意点

1. 同一人ばかり呼ばせないようにする。
2. 真上に投げることは、むつかしいので、サークルは十分大きくとらせて置く。
3. 位置が定ったら小円をかかせるのがよい。
4. 投げ上げる代りに、床、あるいは地面に一度ぶっつけさせてもよい。
5. いろいろボールを使用してみるとよい。



以上で投捕球を基礎とした遊びの主なるものを報告したが、次の回には、バッティング（打つこと）と、キッキング（蹴ること）を基礎とした遊びについて報告する。

理想の保育者の資質について④

西本　脩

これまで数回にわたって、理想の保育者の資質として重要と思われるものを挙げてきましたが、最後に、その他の条件について述べてみようと思います。

四、その他の条件

1、年齢　前に挙げたシュナイダーの「理想的教師の心身の特性」の表にもあったように、ある教育学者は、若い人をよいとしているのに対して、他の教育学者は、年いった人をよいとしています。このようなことからも明らかなように、実際、よい保育者として、若い人がよいか、あるいは年いった人がよいかということは、一概にはいえないことと思います。つまり、年齢は、よい保育者たるの条件としては、さほど重要なものではないといえましょう。ただ、前に「人格・性格的条件」として述べたように、精神的な若々しさは、肉体的な老若にかかわらず、保育者として非常に大切なものであると思います。幼児とともに体を動かすことが億劫な人、戸外へ出ることがいやな人等々……の年寄りじみた人では困ります。保育者は、いつも精神的な若さを保って幼児といっしょにとんだり、はねたりして遊べるようでなければなりません。またいわゆる頭の古い人や頑固な人も困ります。もちろん、何でも新しいものにとびつくようなのがよいというのではありませんが、自分がずっと以前に習ったことが絶対に正しいとして、排他的になったり、今までやってきた自分の経験に間違いはないと、自分の腕に自信を持ち過ぎて、他人の意見に耳をかさないというようでは、世の中の進歩について行けず、一人取り残されてしまうでしょう。世の中は絶えず移りかわりつつあります。保育の世界も、他の世界と同様に。幼児もいつも成長発達しつつあるものです。したがって、保育者も肉体の年齢に関係なく、いつも世の中の進歩とともに、また幼児の成長とともに、たえず勉強し、成長をつづける精神的若さを持っていることが必要です。

このように見てきますと、年いった人は不利で、若い人がよいように思われますが、必ずしもそうはいえないようです。若い人は何といっても、保育の経験はもちろん、世の中のいろいろな経験も浅いものです。学校を卒業してすぐに幼稚園や保育所に勤務したよう

な場合、今までの学習の結果を生かそうとして、一生懸命努力するのですが、保育の経験がないために、あまりにも杓子定規に学校で習った一般論をそのまま、個々の場合に当てはめようとします。そのときどきの状況の変化に応じた臨機応変の処置をとることがむずかしいようです。そのために、保育に対する情熱ははげしいのですが、保育の方法は拙く、一生懸命やっているわりに効果があがらないということになります。そこには矢張り経験というものが必要になってきます。熱と若さは、たしかに尊いものですが、それだけで遮二無二進もうとすると、障碍にぶつかって動きがとれなくなってしまいます。はじめはだれでも経験年数〇から出発するわけですから、その新進気鋭の若さと熱とをもって、一生懸命勉強をしながら、経験豊かな先輩の保育者にいろいろと指導を受けながら保育をすることが大切でしょう。

ですから、一つの幼稚園や保育所の中には、年輩の経験年数の長い保育者と若い保育者とがともにいて、お互いに相補い合うのがよいのではないかと思います。年いった保育者ばかりでも、また若い人ばかりでも困るのではないでしょうか。そうして、この場合、年いった人も若い人もお互いに謙虚な気持で、たずねあい、教えあい、話し合って、お互いに自分に欠けたところを補い合うようにして、ともに力を合せて保育に当るのがよいように思います。若い保育者と年いった保育者とがはなればなれになったり、両者の間に感情的なもつれがあったりすると、その園の保育の効果があがらなくなってしまいます。

2、結婚　先の年齢と関連して、よく問題になるのは、保育者として未婚の人がよいか、あるいは既婚者がよいかということです。これもなかなかデリケートな問題ですが、一概にどちらがよいとはいえないように思います。

未婚者は、若さと熱にあふれ、家庭の雑事にあまりわずらわされないで保育の仕事に専念できる反面、自分の子どもを育てた経験がないので、子どもの発達段階を充分に理解できず、そのために子どもを非常に甘やかしたり、反対に、子どもに無理なことを要求し過ぎたりしかねません。また子どもの扱い方が下手であるとか、世間知らずのお嬢さんであるというようなことで、親達からの信頼を得られなかったりすることもあります。

また未婚者の中でもとくによく問題にされるのは、いわゆるオールドミス（老嬢）のことです。保育の上で考えなければならないことは、老嬢のパーソナリティー（人格）が幼児に及ぼす影響についてです。世間でよくいわれることは、老嬢は若い未婚婦人や既婚者とちがって、性格的な円満さ、調和を欠いているということです。もちろん、すべての老嬢がみんなそうだというのではありません。老嬢の中にも、まことにりっぱな円満な人がらの持ち主が多くいます。けれども、比較的に見た場合は、何か片寄った、あるいは足らないところのある性格の持ち主が多いといえるかもしれません。ある人は、あたかも自分の恋人や夫や子どもででもあるかのように、無闇に園児をかわいがって、甘やかしたり、世話を焼きすぎたりします。そのために、子どもに対する自立性・独立性のしつけがうまくできないような場合もあります。また、あ

る人は、非常にヒステリックになって、自分の心の中の満されないもの、イライラした気持のハケロを園児に求めたりします。この場合は、前の場合とは逆に、非常に厳し過ぎて、叱言が多くなったり、子どもに対する抑圧が強くなり過ぎます。また、ある人は、気分にむらがあって、機嫌のよいときには無茶苦茶に子どもを甘やかし、放任しておきながら、ちょっとまかりまちがうと、ひどく子どもに当りちらしたりするというように一貫性のない態度をとるようにもなります。(このようなパーソナリティーは何も老嬢に限るわけではありませんが)このようなパーソナリティーの保育者が幼児に対して悪影響を及ぼすことについては、すでに「人格・性格的条件」のところで述べましたので省きます。

一方、既婚者は、自分の子どもを育てた経験を保育に生かすことができるので、子どもの取り扱いにも慣れており、うまく、また未婚者よりも、育児・家事その他の苦労もしてきているために、いわゆる世間を知っています。そのために園児の親達から信頼を受けることも多く、彼らを教育したり指導するのには、未婚者よりも都合がよいようです。がその反面、家庭持ちであるために、家事にわずらわされて仕事が手薄になったり、仕事と家庭を両立させるために悩むことが多かったり、肉体的・精神的に重労働になることが多いようです。保育の仕事を十分にしながら、しかも家庭をうまく管理していくのにはいかにすればよいか、妊娠、出産、育児などと園の仕事をいかに調和させていくかなどの問題があります。

現在の日本の家庭の生活状態では、一般に婦人が家庭と職業とを両立させるのには、非常な困難を伴うようです。ことに勤務時間が長く、労働のはげしい保育者の仕事と家庭の仕事を両立させることは、なかなかむずかしいことです。そのために、結婚すると、保育の仕事を辞める人が多いようです。このことは、幼稚園や保育所への就職希望者にとってはありがたいことかもしれませんが、広く我が国の保育界の進歩発展という点から見ると、マイナスになっているように思います。学校を卒業して、熱と若さをもって就職し、最初の一年間は無我夢中で先輩の保育者の導きにしたがって過し、二年、三年とたつにしたがって、大分慣れてきて、いよいよこれから、本格的に自分の身についた保育をし得ると思われる頃になると、結婚のために辞めなければならなくなります。その後任には、また新卒の人が前任者と同じことを始めから繰り返す。こういったふうで、幼稚園や保育所の保育があまり進歩しない原因の一つは、いつも新米の保育者が多いということでしょう。せっかく慣れて、これからというときになると辞めて、また新米の人に代る……こういうことを繰り返している間は、なかなか発展し難いでしょう。こういったことを解消するためには、結婚後もずっとつづけて、保育者としての仕事をしていけるように、家庭生活の合理化をはかり、家族の理解・協力を得て幼稚園・保育所の仕事を合理化し、保育者相互間の理解・協力が必要でしょう。

以上いろいろなことを述べましたが、要するに、若い未婚者でも、老嬢でも、既婚者でもよいわけで、このようなことは、よい保育者の条件としては問題になりません。大切なのは、やはり、一人ひとりのパーソナリティ

ーです。一つの園の中では、既婚者と未婚者がともにいて、お互いに欠けたところを補い合うことが望ましく、この場合に、お互いに相手の立場を理解し、尊重して、協力し合うことが大切です。

3、家庭　私たちのパーソナリティーに対する家庭の影響は非常に強いものがあります。家庭内にトラブルや問題がありますと、その人のパーソナリティーにも歪みを生じてくることが多いものです。本当に円満な人格の持ち主は、暖かいよい家庭に多いものです。したがって、よい保育者はまた、よい家庭人であることが必要であると思います。よい家庭というのは、お金がある、経済的に裕福ということではありません。いくら経済的に恵まれていても、家族の間がしっくりしなかったり、冷い人間関係にあるのではよい家庭といえません。せまいながらも楽しい我が家といわれるような暖い家族関係、人間関係にもとづいた家庭がよい家庭です。よい保育者は、家庭においては、よい娘であり、よい妻であり、よい母であり、よい姉でなければなりません。父親や母親といつもいいあらそったり、心配をかけるような親不孝娘、夫との和合をはからないで、我が道をいくというような妻らしくない妻、我を通すために離婚までする妻、我が子を他人に預けっぱなしでほとんどかえり見ないような母らしくない母では、本当によい保育者にはなりにくいと思います。外から見た場合、一応仕事はできるようでも、こういう人には、きっとパーソナリティーの歪みがあると思われるからです。たびたびいいましたように、よい保育者として、もっとも大切な条件は、円満な調和のとれたパーソナリティーを持っていること、いいかえれば精神的に健康な人であることです。

以上、理想の保育者の資質について、いろいろと考えてきましたが、最後に参考までに東京都で規定されている教員適性検査のうち、身体検査で不合格となる基準を挙げておきます。

1、身長　一五〇センチ未満の者
2、栄養　著しく障害されている者
3、視力　両眼で矯正視力〇・七に満たない者
4、色神　異常ある者
5、眼疾　トラホーム、その他伝染性眼炎ある者および高度の斜視
6、聴力　難聴ある者（3/6）
7、精神機能　障害ある者
8、循環器　心臓の器質的疾患のある者
9、せき柱、胸廓　著しい異常のある者
10、言語　吃音および発音障害のある者
11、運動機能　著しい障害のある者
12、結核性疾患　(イ)既往症のある者　(ロ)打診聴診で所見のある者　(ハ)レントゲン検査で所見のある者　(ニ)かくたん検査で菌陽性の者　(ホ)赤血球沈降速度異常速進の者　(ヘ)人工気胸中の者
13、その他伝染性疾患のある者
14、容姿外見著しく異常なる者

（筆者は大阪樟蔭女子大学助教授）

幼児の教育内容とその指導
お茶の水女子大学附属幼稚園幼児教育研究会編
二三〇円　〒三二円
……フレーベル館発行……

緑の六月

ヨーロッパの旅

平井信義

六月になってからも、なお、外套が恋しい日が何日かあったが、木々は日々その緑を増して、並木の下を幾組かの夫婦が手を取り合って散歩する姿が目につくようになった。私はそうした姿と行き交いながら、下宿から大学への道を、朝夕せっせと歩いた。

私の留学の目的は、小児の精神病理学の研究のためで、主として問題児の発生機転を探ろうというのであった。我が国の最近の研究は、ともすればアメリカの研究に負い、欲求不満の理論が普及した。母親までが「うちの子の問題は、どんな欲求不満から起きているのでしょうか」と質問をするほどとなったが、私にはこの理論がいつも物足らなく感ぜられていた。そこで、医学においては古い伝統のあるドイツが、どのような理論をもって、問題の子どもの発生を明かにしようとしているかを知ろうというのが、私の切なる願いであった。

問題児のことを、ドイツでは「教育困難児」という。ドイツでは、こうした教育困難児を入院させて、診断・治療を行う傾向が全国的にさかんになり始めている。小児科あるいは精神科において、一病棟をそのために持つことが、方々の大学で実施されている。今後も益々増加するであろう。外来での診断とか治療にはおのずから限界があるから、病棟に入院させて、長期に子どもを観察・検査をして、本当の問題の所在を探ろうというのである。したがって、医者の他に、心理学者・ケースワーカーが配属されている。そのチーム・ワークが円滑にいっているところは少かなかったが、それでも、私のいたペスタロッチ病棟では、十五～二十人の子どもに、医師が二人、ケースワーカーが二人、看護婦が三人も配属され、心理学専政の人が二人も嘱託として働いているのは、羨しい限りであった。「資力のないところには学問がない」とまで謳って、研究のために非常に多くの費用が与えられているのである。

ここに入院する子どもは、精神薄弱児を除く。入院してくると、知能検査を行ってその程度を調べる他、頭蓋のレントゲン撮影を行

う。脳の器質的な病気がありそうなときは、脳波を取る。脳波は、脳神経外科に専門家がいて、コルチコグラムを取る場合さえもある。このコルチコグラムというのは、頭蓋に孔をあけて、直接に脳ずいに極を当てて電流を流し、脳の状態を波に描かせる方法である。

脳波では、たとえば「てんかん」に特徴がある波形が出ないかどうか、右の脳ずいと左の脳ずいとでは差がないだろうか、――とくに脳に器質的な変化があるときに、いろいろな異常が現われてくるものである。

最近、オランダで新しい機械ができて、脳ずいに関するレントゲン診断は、一層進んできた。それは、一秒間に二十枚映すことのできる機械で、首の動脈から造影剤を注射して、それが動脈血に混って流れていく有様をつぎつぎと見ることができるのである。

私が、こうした専門的なお話を敢てする所以は、精神現象に関する診断が、非常にむずかしいものであることを申し上げたかったからで、実際、一回の相談事業では、しばしば大きな誤りを犯すことさえあるような例を持ったからである。まして、一枚の絵によってその子の精神現象を診断するなどということは、思いもよらない軽薄なことといえよう。

エルゼは、落ちつきのない子どもであった。なるほど、家の職業が食料品店でもあり、四人兄弟の三番目であって、母親から余り大切に扱われていない子どもであった。しかし、脳波を撮ってみると「てんかん」に特有の波形が出て来たのである。すなわち、てんかんの「精神運動型」であったのである。この場合にはもちろん、てんかんを治療するための薬を用いることが先決問題である。

マックスは、幼稚園でときどきぼんやりしていることがある。非常にわずかな時間であるが、先生の方に注意をしていない。何度もそれを咎めたが、一向になおらない。両親は両親で、うちの子どもは空想的なところがあって、そのためだと主張する。お話を作らせるとなかなか上手なのである。だが、脳波をとってみたところ、これも「てんかん」に特徴ある波形が現われたのであった。すなわち、てんかんの「小発作」で一、二秒意識を喪失する形のものがあったわけで、早速薬を用いる段取りとなったのである。

しかし、脳波をとれば何でも分るわけではない。確実に「てんかん」の発作があるにもかかわらず、その波形が現われない例もある。全く問題のない子どもにも「てんかん」に特徴ある波形が現われてくることもある。したがってこの点でも、いろいろな論議がある。実際、しっかりした診断を立てようとすると、なかなか面倒なものである。

私のいたペスタロッチ病棟にも、いろいろな子どもが出入りした。「胃潰瘍」の子どももいた。胃潰瘍も、精神的原因で起る場合もあるといわれ、確かにその子なども、家庭環境は実に悪い子どもであった。おかあさんが亭主を三度も変えるような人であった。また、しゃっくりの止らない子どももいた。しゃっくりは横隔膜のけいれんであるので、横隔膜に来ている神経を切ってしまったところ、たしかによくなった。そして退院したわけだが、家に帰った途端にそれが再発したのである。ところが再び病院にやって来るや、忽ちに

止ってしまったのである。この子の場合も、家庭環境がよくなかった。たしかに家庭環境が悪かったりすると、こうした病気が起るのであるが、そう言いきってしまってもよいが、他に何か身体的要因がないかを知ろうというわけで、私のいた大学では植物神経の検査を念入りに行っていた。その他吃りの子、お寝しょの子、脱糞症の子などがつぎつぎと入院して来たし、暴れん坊や、非常に引っ込み思案の子、ものを喋らない子も入院してきた。さらに、極端に痩せていて太らない子や、どんどん太って困る子ども入院した。こうしたからだの問題であるようにみえても、あるいは心理学的原因であるかも知れないような、あるいは原因とまでいかなくとも、心理的なものが加勢しているような場合を捉えて、その本態を知ろうと努力しているのであった。いろいろな検査をつぎつぎに行い、その間に具さに子どもを観察しようというのが、こうしたペスタロッチ病棟などのねらいであった。

もちろん、心理的な検査もする。日常の行動観察を十分に行う他、智能テストはもちろんのこと、大きい子どもにはロールシャッハテスト、T・A・T、あるいはワルテック。しかし欧洲で最も広く環境診断に用いられているのがセノテストである。

セノテストというのは、積木とか樹木を形取った板だとか、年寄・父母・子ども・赤ん坊などの人形とか、若干の家畜・猿・鰐・狐などの組み合せになっているテストの道具を用いる。そして、検査の対象となる子どもに「これを使って何か作ってごらんなさい。あなたの好きなものでいいのですよ」と言う。子どもは約二十分、それらの道具を用いて、自分の思ったものを作るが、作ったものによって、子どもの精神環境を分析しようというわけである。ある子どもは、第一回目は全く形式のものしか作らなかった。そのような場合は、日を置いて繰り返してみる。そうすると、十字架の立っているお墓を作り、その下に妹を置いた子どもがいる。父親を鰐に嚙ませて遊んでいる子どももいる。それによって、その子の父親や妹に対する気持の所在がわかり、かつ父親のその子に対する態度や兄弟に対する扱いを類推することにもなる。

このテストももちろん一応の検査方法であって、これのみに頼ることは戒められている。いくつかの方法を用いて、子どもの心理を少しでも理解し、問題発生の根源を探らなければならない。

子どもの心理を理解することのむずかしさを知ったのは、このような各種の方法を用いてもなお、理解し得ぬ子どもの心理がたくさんあることであった。環境が悪い子どもであっても、同様な環境に育ちながら問題が起きない場合もある。子どもの性向とか素質を理解してかからねばこの問題は解決できないと、ドイツの友人と語ったのは、そんなときであった。

六月は、こうして私の研究のしめくくりと、学生に対する講義「日独小児科における発育の比較について」の準備に忙殺されて過したわけである。

（筆者はお茶の水女子大学助教授）

——幼児の知能の研究——

知能検査の誤差と信頼度

（下）

XIV

村山貞雄

10　練習効果と信頼度

練習と知能値の向上

知能検査の問題は、多くのばあい、学習効果の少ないものを選んであるが、学習によって多少の効果があがる。

とくに、知能検査の問題をあらかじめ知って練習したばあいは、練習効果が知能指数で十五ぐらいあがることがある。しかし、いくら練習してきても、知能指数の全然あがらない子どももいる。

練習してきて知能指数がよくあがる原因の一つとして、練習効果の高い問題がとびとびにポツンポツンとあるので、練習した結果その問題ができたために、さらにむずかしい数問をやる資格が生じ、実際にやると、またポツンとできて、さらに数問をこころみる資格が生じることも見逃せない事実である。(たとえば、鈴木ビネー式知能検査のばあい、第二十八、二十九、三十問あたりが山で、そこを通過すると、そのあと、問題をかなり多く施行することが多いが、これは以上の原因によるものであろう)

練習と問題の内容

知能検査の問題のうち、練習効果が比較的あがりにくいものとして、(一) かずや文章を記憶（して復唱）する問題、(二) （絵について）叙述する問題、(三) 計算の問題がある。

知能検査の問題のうち、練習効果が比較的あがりやすい問題として、(一) かずを逆唱する問題、(二) 類似点または差異点をあげる問題、(三) 数詞を逆に言う問題、(四) 常識にかんする問題などがある。

どのような問題が練習効果があり、どのような問題が練習効果がないかということをしらべるために、鈴木ビネー式知能検査の第二十二問から第三十九問までの問題にかんして、六歳台の子どものうち、あきらかに練習していると思われる者二十名（男児十二名、女児八名）について問題内容の合否をしらべ、条件児として、六歳台で知能指数がそれぞれ前述の子どもと大体おな

第1表　練習と検査問題

番号	問題名	あきらかに練習している子どものマイナスの頻数	条件児のマイナスの頻数	差
22	絵中の遺漏の発見	0	0	0
23	**左右の区別**	2	0	−2
24	了解問題	0	0	0
25	色の名	0	0	0
26	了解問題	1	0	−1
27	菱形の模写	1	1	0
28	**文の復唱**	7	2	−5
29	**絵の叙述**	6	2	−4
30	記憶により差異をあげる	2	1	−1
31	五数の復唱	6	5	−1
32	**20から1までの逆唱**	8	10	+2
33	釣銭の計算	15	16	+1
34	五箇のおもりの比較	11	12	+1
35	用途以上の定義	11	11	0
36	書　取	15	16	+1
37	時日を言う	17	18	+1
38	**数似点をあげる**	5	7	+2
39	**四数の逆唱**	10	13	+3

じ者二十名（知能指数の差がそれぞれ五以内の者）をえらんで、その問題内容の合否と比較したところ、第一表のようであった。

この表で第二十三問の「左右の区別」は、あきらかに練習している子どものほうがマイナスが二名多くでているが、これは、それだけの能力のない者にあまり左右をやかましく教えすぎると、かえって混同してしまうためかもわからない。

練習と幼児の態度

普通の幼児にくらべて、あきらかに練習している子どもにとくにめだつ態度を、検査者がテスト中に調査用紙の各項目にチェックする方法で調査したところ、

一、自信がないと、答えない。
二、考えこんでだまってしまう。
三、身体を動かしている。
四、努力しない。
五、固くなる。
六、思っていることをうまく表現する。

などがめだった。（頻数順）

逆に、あきらかに練習している子どもが普通の子どもにくらべて少なかった態度として、

一、よく考えて答える。
二、おちついている。
三、動作（反応）がおそい。
四、ものがはっきりいえる。

などがめだった。（頻数順）

また、練習した者にはとくに積極的である者と特に消極的である者がともに多かった。

なお、検査者に、被検者の態度についてとくにめだつことを、テスト中に自由に（あらかじめ項目をつくらずに）、筆記させたところ、つぎのようであった。

あきらかに練習している子どものばあい、その態度でとくにめだつこととして、

一、こちらの教示をよくきかずに行動を開始する（問を最後まできかずに早合点して

しまう)、二、自分の経験しない問題はわからないと投げる、三、非常に要領よくとのった答えかたでスラスラ答える反面、まったく答えられない問がある、四、できることは割合はきはき答えるが、ちょっと自信がないと黙りこんでしまう、五、検査の終りのほうは努力しないで、すぐわからないということが多い、六、すぐに「忘れちゃった」という、七、家で練習することによって、かえって自信をなくしている様子である、八、よく発表するが、覇気がとぼしい、九、記憶が弱い、(たとえば記憶画の問題は「これかな、これかな」といくつもえがいて、しかも問の絵と全然ちがう)などがあった。

練習の有無のしらべかた

練習をしているばあいは、知能値が上昇することがあり、その結果、正しい知能がわからないために、知能検査の結果は信頼度がひくい。

そこで、幼児が知能検査の練習をしているかどうかを知る技術に長じることは、知能値の信頼度をあげることになる。

幼児が練習しているかどうかを知る方法として、つぎのことがあげられる。

一、検査問題の合否の内容についてしらべる。例えば、記憶の問題がとくにできなかったり、常識や類似の問題が特にできている場合は、練習をしている可能性が高い。

二、検査態度を観察する。たとえば、前述の態度が多い子どもは、練習をしている可能性がある。

三、被検者にたずねてみる。被検者は、無邪気であるから卒直に答える。

しかし、幼児の中には、ほんの少し学習したことでも、得意になって誇大にいうことがあるから、幼児がいったというだけで、練習をしていると断じてはならない。

四、検査問題よりちょっと変えた問題をだしてみて、幼児の反応をしらべる。

11 施行条件と信頼度

ここでは、個人用知能検査について述べよう。

知能値の信頼度に大きな影響をあたえる施行条件として、

一、場所にかんする条件

二、時間にかんする条件

三、被検者の心身の状態

四、検査者の状態

がある。このうち、一と二は、広い意味では三に包含されるものである。

以上の四大条件のほかに、検査用具その他の小さな問題がある。

場所

イ、雑音――静かであることが大切である。室内に起る騒音はもちろん、室外に起る騒音も、しばしば知能値を低下させる。騒音でなくても、子どもの興味をひくような声や音は同様な障害をおこす。

とくに記憶の問題や注意にかんする問題の信頼度をさげている。

ロ、光線――あまり明るすぎても、くらすぎても、知能値をさげる可能性がある。日光のまぶしい直射光線やこころをいらだたせる反射も好ましくない。

壁の色は、どぎつくない、おちついた色が望ましい。

ハ、備品――被検者の気分をやわらげる意味で、額が一つぐらいなら、あってもよい。

それ以外の品物は、できるだけ少なくしておくほうが無難である。とくに、被検者

の興味をひく者や、検査にさしつかえのあるものは、結果にさわりがある。

たとえば、名称をあげさせる問題で、幼児が、室内の玩具や教具を列挙することがある。時計をおく場合も、被検者の位置からみて視界外になるところにおいておくほうがよい。

このように、質問の内容と関連のあるものを、なるべくみえる所におかぬように気をつけることが望ましいが、この意味から、窓の外も見えないほうがよく、夏もレースのカーテンをしておくことが望ましい。

ニ、室の広さ――室の広さは、だだっ広くさえなければ、せまいほうは、検査にさしつかえない程度であれば（床面積五乃至六平方メートル以上であれば）いくらせまくてもよい。

ホ、テスター以外の人の在室と出入

子どもによっては、テスター以外の人が在室しているために、知能値がさがることがある。

すなわち、よく知らない人がいるために、気が散ったり、圧迫されて何となくおされ気味になり、なかなか返事が言い出せない子どもがいる。

検査者以外の人の出入りがはげしい場合も、知能値がさがることがある。検査中は、検査者以外の人が検査室に出入しないことが理想的であるが、出入りするとしても、一、二回程度なら、それほど検査の妨害にはならない。しかし、これも問題による。たとえば記憶の問題などでは、やはり影響することがある。

同伴者たとえば母親が入室したばあいの信頼度については、一概にはいいにくい。

すなわち、母親がそばにいると、母親に気がねしたり、てれてしまったりして、あまり言えなくなる子どももあれば、母親がそばにいると、おちついて、よく言えるようになる子どももあるが、いずれにしても、父兄の入室は、かならず影響をあたえるといってよい。

ゆえに、同伴者の入室は、そうしないと検査不能になるばあいだけにとどめなければならない。

時　間

検査時刻のうち、午前と午後の問題については、本誌の昨年の十二月号で述べたから、ここでは省こう。

検査時刻は、一般に午前のほうがよいが、昼近くは、幼児が空腹のために、テストにたいしておちつかず、知能値がさがることがある。

検査時間は、三十分をすぎるとだれてくることが多く、約五十分以上になると、六歳台の子どもでも疲労がめだち、おちつきがなくなる。

知能優秀児は検査時間が長くなりがちで、約五十分をこえることがあるが、検査の最後のほうはつかれて、そのために知能値が低下することが多い。

被検者

被検者の心理状態は、幼児期ではとくに検査結果に影響するところが多い。幼児の知能検査の結果は信頼度がひくいが、その原因の多くはここにあるといえる。（このほか、標準化の困難なこともその原因の一つである）

知能値に影響する被検者の心身の状態としてつぎのようなものがある。

（一）疲労度、たとえば幼稚園や保育所からの帰宅の途中や、前日に運動会（などの

行事）があったので、その日は幼稚園が休みになって、それで検査にやって来たようなばあい。

（二）、生理的故障、たとえば小便がしたいのを我慢して検査をうけたばあいや、風邪をひいて頭がいたいようなばあい。

（三）、テスト場面に入る心理的障碍、たとえば、親が高い知能指数を非常に期待して、緊張度が高く、テスト場面へ入ろうとする被検者へのはたらきかけが強すぎるようなばあい。

このほか、スムーズにテスト場面にはいれる子どもと入れぬ子どもでも、結果が少しちがってくる。

検査者

知能値に影響をする検査者の状態としてつぎのようなものがある。

（一）、検査者の経験が深いか浅いかということもたいせつであり、検査者の経験が浅いばあいは、全体的に知能値がさがる傾向がある。

（二）、検査者の声が小さすぎたり、大きすぎたり、方言がはいったり、言葉の抑揚が変っていたりするばあいも、知能値がさがりやすい。とくに言葉の抑揚は影響するところが大きい。また、方言とまでいかなくても、その人の話しかたにくせがあると、幼児に意味が分らないことがあるから注意を要する。

（三）、検査者の疲労度が一定以上に達すると、知能値の信頼性をさげることが多い。

すなわち、検査者がつかれていると、もう一回きけば被検者が正しい答をいったかもしれないようなところを、そのままきかずにきりあげることがある。このように、検査者が疲労の結果、検査のやりかたがつい粗雑になりがちであるということは、あらそえぬ事実である。

（四）、検査者の性も影響することがある。すなわち、検査をうける子どものほうに、性にかんする好悪の個人差があることがある。たとえば、男のテスターにたいして非常に圧迫感じる女の子がいる。

この講座を終るにあって

十四回にわたって続けてきたこの講座もいよいよ今月号で終ることになりました。

この講座をはじめるに際して、津守先生は、この種の講座としてはめずらしいおもい切った企画で、啓蒙的な面を軽視してむずかしい言葉をつかってもかまわないから、高度な研究的なものを書くようにといって下さいました。

また編集部のかたは、月刊雑誌としては、例の少ないと思われる筆者校正を全月号にわたって許してくださいました。このことは編集のかたには、かなり面倒なことだったはずですが、最後までいやな顔をされずに協力して下さり、おかげで数表などもかなり正確なものが印刷されました。

また、この講座に必要な調査や統計は、愛育研究所教養部員の多田淑子氏と、江戸礼子氏（旧姓和田氏）が、献身的な努力をはらって下さいました。この講座は、この二人のかたがなければ、到底つづけえなかったことでしょう。

このような厚意に甘えながらも、筆者の菲才のために、本講座を読みかえしてみると、本意ない内容の多いことに気がつきます。まったく慚愧に堪えないおもいです。今後努力して、このつぐないをいたしたく思っています。（筆者は愛育研究所員）

（3月号）

保育雑誌より

保育の手帖

一年のしめくくりである三月を迎えて、山下俊郎氏の〝この一年をふり返ってみて〟に保育界の一年の間の問題がかかれている。第一に昭和三十一年度は幼稚園教育要領の実践第一年であったこと。第二に幼稚園創設八十周年に当り、記念式典が挙行されたこと。第三に保育所が急激に増大し、条件の認定や措置費の問題など再検討・再編成の時期であること。第四に無認可保育所の問題が浮かび上ったこと。第五には保育の内容の問題で諸研究会や著書研究に倉橋賞が授与されることになったことと、日本教育学会に今年度から幼児教育部会が設置されたこと。いまさらながら、一年間の活潑な動きに敬服し、保育界の発展・業績の偉大さを再認識することができた。

保育講座では、健康のところで、斎藤文雄氏が成長について専門の医学的立場で述べられているが、終りに、子どもの成長には焦りをみせてはいけない、正しい育て方をやってさえいれば普通以下でも差し支えなく、その子の持って生まれた天分に応じて最大の伸び方をさせてやればそれでよろしい、とある。成長ということは肉体のみでなく精神的な伸び方についてもいえることである、ということを考え合わせるとき、親たちへのよき警句と思われる。

その他、現場に直接参考となる問題が数多いが、新劇俳優の岸輝子さんの、映画〝森は生きている〟が完成するにあたっての努力と情熱のほとばしる一文は読者を感激させる。

保育の友

もうすぐ四月、長い間幼稚園・保育園の生活に馴れ親しんだ子どもたちが小学校に入学する季節である。保育する者にとっては、いつくしんだ幼な子たちが大きくりっぱになって、小学校の生徒と成長した嬉しさ、そしてその子どもを手ばなす淋しさ、そしてもう一つ、子どもたちが新しい生活にうまく適応していくことができるであろうかという心配事がある。一見、小学校も幼稚園も保育園も似た生活のように見えるが、ときに子どもは楽しかった幼稚園や保育園とは違った抵抗を学校から受けることがある。本号は、そうした問題を含めて、『小学校と保育所』を特集としている。

保育所がわから小学校に望むこととして「保育所ずれ」をどうするか……新井正子・「話合いの場」をつくろう……風間ゆりの二氏の論文がある。新井氏は保育園ずれをしたなどといわれる子どもを作らぬために、(1)小学校・保育園がばらばらの教育体系になっているが、一貫したカリキュラムが必要・(2)地域小学校との連絡協議会を持

つこと・(3)ひとりひとりの子どもの理解のために、各園の個別保育記録を活用する・(4)校外指導の四点を提案している。風間氏は(1)保育園より入学する児童および保育そのものに偏見をもたないでもらいたい・(2)児童の個性をよくつかんで教育していただきたい・(3)児童観を確立しよう・(4)話合いの場を求め、つくろうと述べている。

こうした点について、ある真面目な人々によって、そうした努力と解決策がとられている。私の実践記録「これが私たちの結びつき方です」……下村悠紀、おかあさんたちとの話し合い「入学を前にして家庭との連絡」……谷川正太郎・河田朝子氏などの論文がそれである。実り多き成果を期待したいと思う。

早川元二氏の「幼年教育をどう考えるか」は、幼年教育という大きなワクがひかれる理論的な基礎を探っている。それによれば幼年期は、(1)豊かな経験が次第に言語におきかえられる概念形成の時期であり、(2)事物に対する感情形成の時期であり、そのかぎりで小学校・保育園の教育計画はもっと一本筋の通ったものが欲しいと書かれている。特集の巻頭にふさわしい注目すべき論文である。

がいして本号の各論文には力作が揃っており充実した内容に読み応えを感じるが、その他に本号は予算獲得運動の経過報告にかなりの頁をさいており、これがまたこの誌の特質とも思われた。

幼児の指導

「幼児の問題行動の原因は、問題行動の見られる場に求めねばならないが、その場に作用している条件として、幾つかの重なりあった人間関係を、あげることができる。幼児たちの友人関係・家族関係に目を向けるとともに、忘れてならないのは、問題行動をなくそうと努力している先生と、幼児との関係に原因がかくされている場合のことである。……」と松村康平氏はのべられ、今月号は先生と子どもとの関係を、掘り下げて考えている。先生と園児とのつながりを好ましいものにするため、子ども自身の先生に対する言い分と、先生の子どもに対する言い分とをあげているのは、より好ましい人間関係をつくるための一つの手がかりになるであろう。さらに子どもの言い分を具体的に分析しているのも、おもしろく、園児たちとの生活をよりいいものにしていく努力をしたいと思った。

山崎ちとせ氏の「新しく保育者となる人のために」は、すでに現場にいる者にも反省のよい機会を与えてくれる。氏は、職場になじみ、尊い経験を聞き、自分の持っているものを措しみなくわけることによって、保育の前進にわずかでも役立てようとする気持が大切である。また保育の効果を急がないで、子ども一人ひとりを十分にみつめての保育でありたい。保育者・母親との話し合いの機会を持ち、一人よがりにならな

いことも大切で、また図書で勉強することも必要であるが、十分批判して取捨選択するように心掛けたい。保育の研究はいうまでもなく、私生活にも研究工夫が必要で、時間と労力のむだをはぶくようにしなくてはと、強調しておられるのも、いろいろな点で参考になると思う。

幼児と保育

三月号は「生活改善と幼児教育」を特集している。生活改善ということは、いろいろな面からしばしばうたわれていることであるが、ここでは幼児教育の主要なにないてである女性の生活改善の問題をとりあげている。幼児教育の根底にある問題として大事なことであろう。特集の中でも、「生活改善は頭の切り替えから」という座談会はおもしろく読める。ここで生活改善の問題の一つとして〝おかあさん自身の心の中にある壁〟をとりあげて、解決の糸口を身近なところに求めていることは、希望をもたせるもので、おかあさま方に一読をおすすめしたい。

「指導技術」は毎月のことながら、具体的・実際的で、直接に保育の役に立とう。

「望ましい母親とは」は、五か月にわたって述べられた〝親の態度と子どもの問題〟の総まとめとして、望ましい母親の条件をあげたもので、たいへんわかりやすく説明されている。

「最近の美術教育」では、昨年の二つの研究集会の概略が紹介され、今日の幼児の美術教育の問題が単なる抑圧解放論の美術教育から、生活画の問題、指導体系の問題と展開されていることがうかがわれる。

保育ノート

手しおにかけた、といおうか、何か自分のもの、という気持で接していた子どもたちをおくり出すという、おとなには感傷的な気持になる卒業の時期に当って、「卒業」というものについていろいろの角度からみている。

第一頁の「卒業式を迎えるに当って」の内容を要約すると、子どもたち（将来に生きる若い精神）にとっては、自分の過去をかえりみようとするより、あすから始まろうとする未来の生活に満ち満ちている。その子どもたちに自信をもたせることこそ大切なことである。ということが強調されている。次の「卒業式のあり方」では各園の持ち味によるいろいろの形があげられている。その中で「こんなやり方はさけよう」というところに、十二月号だったかの特集「行事」のときの問題と同じようなおちいりやすい点があげられている。

その他「卒業」ということにつづいて必ず出てくる、小学校との関連について、

・幼稚園教育の重要性について。

・小学校低学年のカリキュラムを知る。

・都合のつく限り、個々の幼稚園で小学校

の授業を参観する。
・共同参観と協議会をもつ。
・実際の学習状態からつかみ得た子どもたちのすがた。
・アンケートによる小学校がわの意見。

の各項について実際例をあげながら述べられているのは、必要を認めながらあまり手がつけられていない現状からみて有益なものである。

保育

〝ほたるの光、窓の雪〟と流れる三月の卒業期に、幼稚園の園児も小学校へ進学する。この三月号にも四月入学を前に、〝小学校との連関を中心として〟という稿が目につく。

幼年期の教育（坂元彦太郎氏）
社会性の面より（石黒ミナ氏）
言語の面より（菱沼太郎氏）
文字指導より（池田欣一氏）
絵画製作より（藤沢典明氏）
音楽指導より（味岡良平氏）
数の指導より（角尾和子氏）

以上、いずれも坂元氏以外は小学校の先生が幼稚園や保育所に要求していられることで、現在すでに行われていることも多々あるし、また、この点はどの程度までしたらよいかしらと実際に迷っていたことも、この頃ではっきり小学校の先生から要求されると自信も持てるし、参考にもなる。園児を小学校へ送るときにあたり、大きな参考となる稿であろう。

現在では小学校との連関があまりよくいかず、教育内容もあまり一関性がないから双方相歩みよればよいが、まず幼児がまごつかず幸福に進学できるよう、不断の工夫と努力とが必要である。小学校は決していやなつまらないところではない。幼稚園と同じたのしいところであるから、充分に実力を発揮し指導性のあるたのもしい幼児であってほしい。また幼児の話法を豊さにするよう幼稚園の教師が細かい神経を使わなくてはならない。文字も書くより読めた方がよい。

表現活動においては、自信を持って表現し、興味も持続し、広き材料にふれ、美しさにも関心を持つように指導しておく必要があり、音楽では、楽しい和音訓練とリズム運動が期待され、数観念も一応幼児の生活の中に関心をもたせるように。と、このように小学校側からは要求し、また望ましい幼児として期待されている。

これは要約にすぎないが、幼児教育への期待が大きなことは私共として再度反省させられ、この上にたつ小学校教育の偉大さはと、目を見開いて期待し、また同時に小学校との連絡をもう一度論義したい気持を引きたたせる。

月刊保育カリキュラム

今月の単元は「もうすぐ一年生」

ねらいは「進学の希望をもたせながら、のびやかに幼稚園生活を楽しませる」である。そこで社会をはじめ六つの保育内容に、最後の幼稚園生活、経験をまとめる意味での計画がたてられている。

次にその内容の大略を一言ずつ紹介すると、健康ではいろいろな運動や遊びをさせることと、基本的生活習慣の完成と、進学前の健康診断について。社会では、進学をたのしんで待つということの中で、小学校の見学や、この頃には身についているべき社会面での望ましい経験四つと、修了式についてのべられている。自然では、芽が出たり、花が咲いたりすることに驚きと喜びをもつ子どもを、どういうふうに伸ばしていくか（子どもを知る。工夫をする。教師自ら自然に親しむこと）ということと、動植物の世話に責任をもつこと、さらに教師の春の花壇のプランが詳しく記されていて参考になる。言語では、とかく親たちに誤られがちな文字に対する考え方に、幼稚園として正しい指導をしたいということ、文字よりも、もっと大切な、のびのびと思ったことを発表する子どもにしたいことなど。音楽リズムでは、三月のうた、リズムバンド、うごき、総合劇が例をあげて、正しい発表会の持ち方とともに具体的にかかれている。絵画製作では、卒園を前に記念となるものを、工夫して作りあうことが大きな活動となっているようだ。材料もあらゆるものをみんな使って、人形・モビール・窓硝子の絵・モザイク・石膏など、いろいろあがっている。さらに一年間の絵や作品の整理を手伝わせ、子どもながらに自らの成長に驚ろいたり喜んだりして、そのときどきを想い出して語り合うのが、また一つの楽しいことといっている。

座談会「小学校入学前の両親教育」は、どのような心構えを両親にもってもらったらよいかを、園長さんに語らせている。一読してほしいところである。

幼児の教育 第五十六巻 第六号
© 定価 五十円
昭和三十二年 五月二十五日印刷
昭和三十二年 六月 一日発行
東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者 津守 真
東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会
東京都板橋区志村町五番地
印刷所 凸版印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町二ノ五
発売所 株式会社 **フレーベル館**
振替口座東京一九六四〇番
◎本誌ご購読についてのご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

保育図書

- 幼稚園真諦……180円〒16円
  倉橋惣三著　B6判146頁
- 子供讃歌……260円〒16円
  倉橋惣三著　B6判　232頁
- 日本幼稚園史……900円〒88円
  倉橋惣三・新庄よしこ共著　A5判　460頁
- フレーベルの教育学……400円〒40円
  荘司雅子著　A5判　354頁
- フレーベルに還れ……200円〒16円
  長田新著　B6判　192頁
- フレーベルの恩物の理論とその実際……450円〒48円
  玉成高等保育学校幼児保育研究会編　A5判　334頁
- 幼児の教育内容とその指導……230円〒32円
  お茶の水大付属幼稚園幼児教育研究会編　A5判　228頁
- 幼稚園教育の実際……250頁〒32円
  宮内孝編　A5判　322頁（普及版）
- 日本の幼児教育……130円〒16円
  ―その問題点をめぐりて―
  長田新・山下俊郎・荘司雅子共著　新書判　182頁
- 幼年期の意味……80円〒16円
  ジョン・フィスク著　小川正通訳　新書判　86頁
- 幼稚園教育要領……8円〒下記
  文部省編　A5判　32頁　〒1部8円・2部～10部まで1部当り5円・11部～30部同4円宛・31部～50部同3円・51部以上〒不要
- 幼稚園教育要領の実践……200円〒24円
  上野・武田・玉越・宮内・小山田共著　A5判　214頁
- 幼稚園教育研究集会集録……110円〒24円
  文部省編　A5判　258頁
- 実験幼稚園の研究報告①……103円〒24円
  文部省編　A5判　248頁
- 改訂幼稚園幼児指導要録の解説……120円〒16円
  玉越三朗・宮内孝・小山田幾子共著　A5判　108頁
- 栄養学の基礎から給食まで……250円〒24円
  武藤静子著　A5判　210頁
- 子供の宮殿……300円〒24円
  ―園舎の建て方とその使い方―
  藤沢宏光著　A5判　206頁
- 幼稚園お話集（上・中・下）…各230円〒24円
  日本幼稚園協会編　A5判　各218頁
- インドのお話集あわてうさぎ……220円〒24円
  内山憲尚著　A5判　174頁
- 折紙教本……250円〒24円
  副島ハマ著　A5判　214頁
- たのしい生活あそび……250円〒24円
  東京都保育研究会音律部会編　B5判　112頁
- 実用保育動きのリズム（1・2・3）……230円〒16円
  賀来琢磨著　B5判　各76頁
- たのしいうたとリズム（1・2・3）…各220円〒24円
  渡辺茂・安藤寿美江共著　A4判　各64頁
- リズミカル表現あそび……350円〒40円
  渡辺茂・安藤寿美江共著　B5判　136頁
- 幼児のためのうたとリズム
  めだかのくに……220円〒24円
  渡辺茂・安藤寿美江共著　B5判　68頁
- 幼児のためのうたとマーチ
  おおきいおうまちいさいおうま……300円〒32円
  松島つね著　A4判　90頁
- 新版音楽カリキュラム（春・夏・秋・冬）…各330円〒40円
  増子とし著　本誌B5判各冊約80頁　解説書つき
- 親と子のたのしいホームゲームとやさしいフォークダンス……400円〒32円
  増子とし著　B5判　140頁
- 佛教讃歌集（幼児篇）……300円〒24円
  日本佛教音楽協会編　B5判　116頁
- 実用讃佛歌舞踊集……280円〒24円
  賀来琢磨著　B5判　80頁
- 幼児劇集はるのひよこ……230円〒24円
  村上幸雄編　A5判　174頁
- たのしい劇あそび……280円〒24円
  周郷博・落合聡三郎共編　A5判　234頁
- こんなときにはどうしましょうか……100円〒16円
  精神衛生普及会編　新書判　118頁
- 幼稚園における指導の実際①……112円
  文部省編　A5判　340頁
- 幼稚園設置基準の解説（仮題）……近刊

東京都千代田区神田小川町2の5　株式会社　フレーベル館　電話東京（29）7781～5　振替口座東京19640番

昭和三十二年六月一日発行（毎月一回一日発行）© 昭和二十三年四月十五日 第三種郵便物認可 日本国有鉄道特別扱承認雑誌第六八三号 幼児の教育 第五十六巻 第六号 定価五〇円 〒四円

古い歴史と新しい編集の観察絵本

キンダーブック

＝第12集 第4編 7月号予告＝

☆お子さま方の感情と知識を
豊かに育てる絵本☆

A4判・18頁
毎月付録付
定価四十五円

〈七月号内容予告〉

☆うみ　え・吉沢廉三郎先生
☆うみはよんでる　え・林　義雄先生
☆みなとを　でる　うた・巽　聖歌先生
☆うみの　こども　え・村上松次郎先生
☆うみの　そこ　え・黒崎　義介先生
☆うみの　こども　うた・宮沢　章二先生
☆しまの　こども　え・武井　武雄先生
☆げきうらしま　たろう　え・鈴木　寿雄先生
☆ちびぞうくん　ぶん・お茶の水女子大付属幼稚園　え・富永　秀夫先生
☆いそのいきもの　ぶん・飯沢　匡先生　え・土方　重巳先生
☆ふろく　しどう・末広　恭雄先生　え・太田　大八先生
別冊付録「つばめの　おうち」
工作付録「ふね」

東京都千代田区神田小川町2の5　株式会社　フレーベル館
電話東京（29）7781～5
振替口座東京 19640 番